

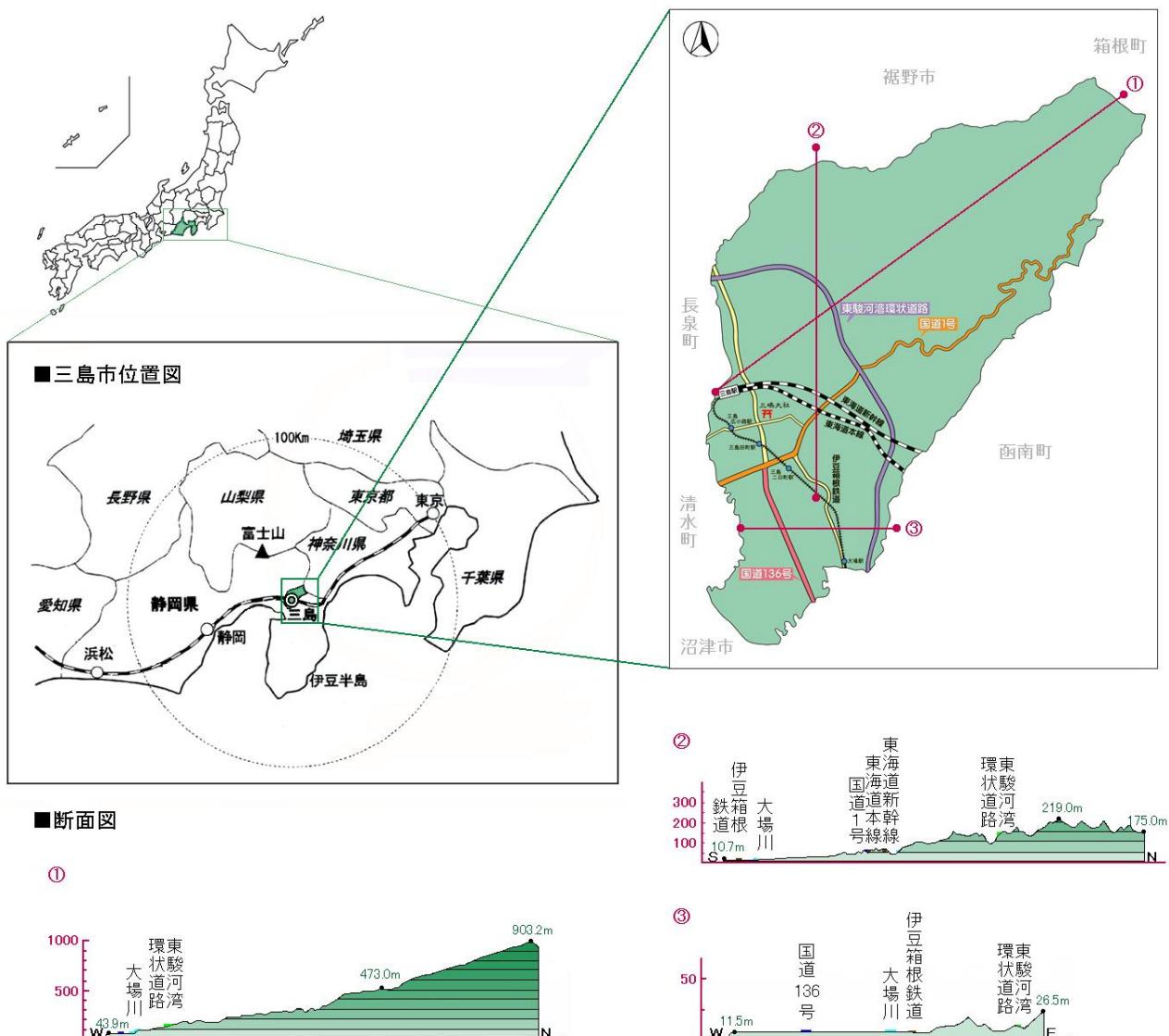
第1章 三島市の歴史的風致形成の背景

1 自然及び社会的環境

(1) 位置

三島市は静岡県の東部、伊豆半島の付け根部に位置する。

市庁舎の位置は、北緯35度6分、東経138度55分で、周囲を見渡せば北西部に富士山、愛鷹山（あしたかやま）を仰ぎ、西から南にかけては静浦（しずうら）山塊から天城山（あまぎさん）を遠望する。一方、東部の箱根西麓では南西方向に向かって複数の尾根が延びており、本市はこの箱根西麓及び上記の山々の間に広がる平野部に位置する。また、周辺自治体としては、北は裾野市、南に函南町（かんなみちょう）、沼津市、西に長泉町、清水町、東は神奈川県箱根町と境を接している。



(2) 地勢

三島市域は、東西 11.107 km、南北 13.242 kmで、総面積 62.02 km²の規模を有し、地勢は、地形と地質的特質により 3 つに区分することができる。

第 1 は、市域の約 3 分の 2 を占める比較的緩傾斜地な箱根西麓地域で、山頂から中腹にかけて安山岩質岩石が分布し、中腹から裾野にかけてはローム・火山灰の火山碎屑物が分布している。

第 2 は、標高約 24m 以上の三島市街地及びその北側の地域である。北側は玄武岩質岩石で構成され、三島市街地は愛鷹山と箱根山の裾野谷に発達した砂礫層の堆積物からなる扇状地である。

第 3 は、東西に走る国道 1 号以南に広がる広大な沖積平野で、三島・沼津地域の平野を含めて田方平野と呼称されている。

また、最高標高は海ノ平の海拔 941.5m で、最低標高は長伏の海拔 6.0m である。

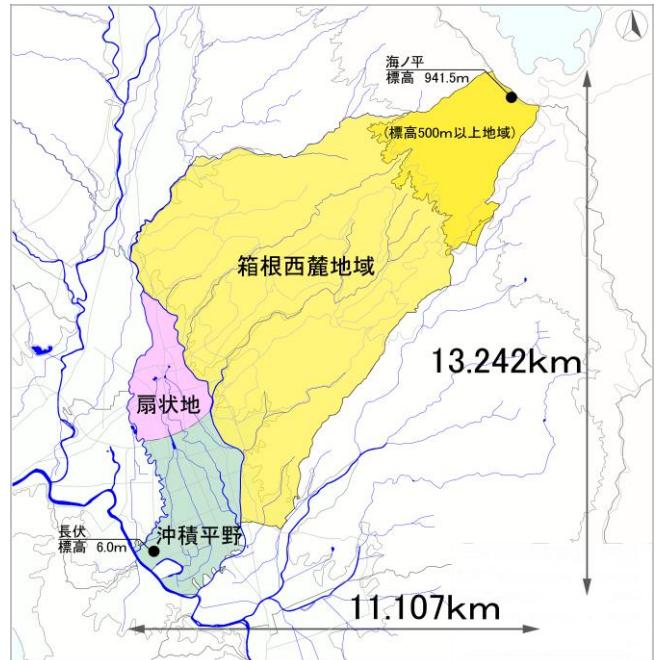


図 地勢区分

(3) 気候

三島地域の気候は、夏は温暖多雨で冬は雨が少なく、乾燥するという太平洋側の気候の特色を有するものの、海に面している近隣の市町に比べ、夏は気温が高く、冬は少し冷え込む。しかし、昭和 56 年～平成 22 年 (1981～2010) の 30 年間の平均で見ると、年間平均気温は約 16°C と比較的温暖な気候である。年間平均降水量は 1,874.4 mm、年間日照時間は約 2,000 時間に及び、市民の暮らしに快適さをもたらすばかりではなく、多くの農作物や畜産物を育んでいる。

【資料：気象庁静岡地方気象台】

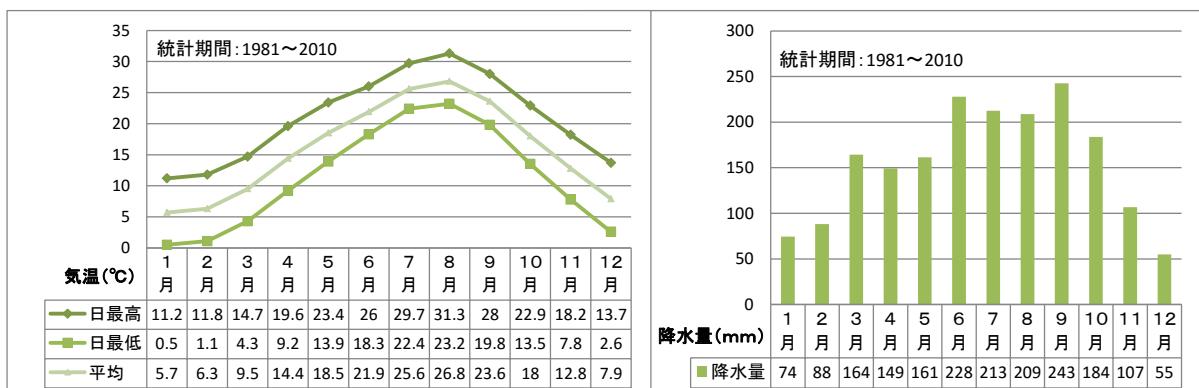


図 気候グラフ

(4) 人口

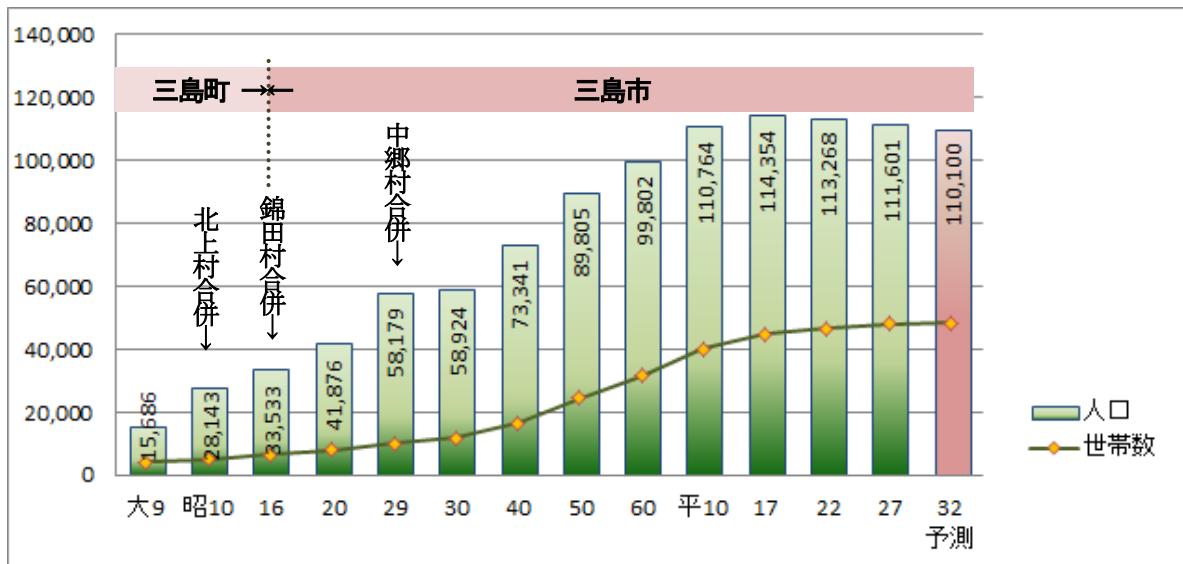


図 総人口の推移

本市の人口は、大正9年（1920）第1回国勢調査時には15,686人であったが、昭和10年（1935）4月に北上村（きたうえむら）と合併し、昭和16年（1941）4月に錦田村（にしきだむら）と合併し三島市が誕生した。昭和29年（1954）3月には中郷村（なかざむら）と合併し、さらに北上・中郷地区を中心に宅地化が進んだため、昭和61年（1986）に人口10万人を突破し、県東部の中堅都市としての地位を確立した。

平成17年（2005）12月に114,354人で人口のピークを迎えるが、以降は緩やかな減少傾向にあるものの、平成10年（1998）以降は安定して約11万人の人口を維持しており、平成27年（2015）12月現在、111,601人である。

しかし、右図のとおり、人口の年齢構成は、未年人口が減少している一方、高齢者人口の割合が増加している。人口減少社会に突入し、同時に少子高齢化が進むわが国と同様に、本市においてもこの傾向は今後も続くものと考えられる。コホート要因法を用いた推計では、平成32年（2020）に三島市の人口は、110,100人と予測されている。

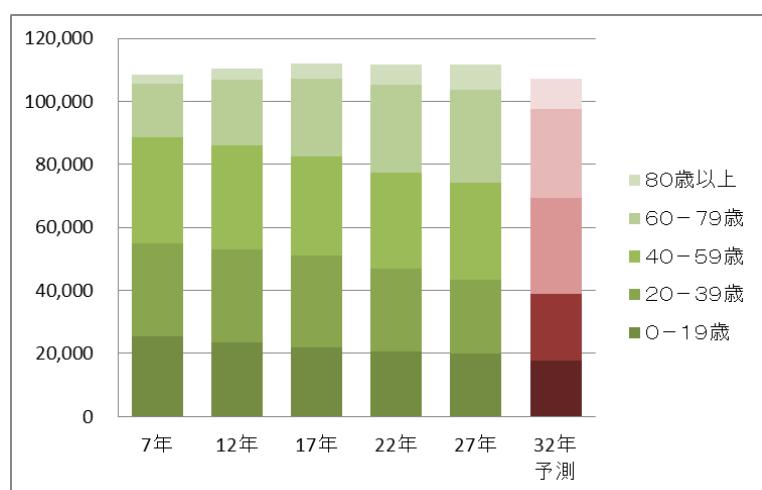


図 人口構成比の推移

(5) 交通

本市は、古代から伊豆国府及び国分寺や伊豆国一宮である三島大社が置かれ、政治・文化の中心地であった。そして江戸時代には東海道中の難所のひとつ、箱根峠越えを控える宿場町として賑わった。ところが町制を施行した明治22年（1889）に、東海道線が新橋—神戸間で開通し、その路線が三島を迂回したため、まちの発展が停滞した。しかし、昭和9年（1934）の丹那トンネル開通に伴い、同年12月に東海道線三島駅が開設され、このことが本市発展の基礎となった。また、昭和44年（1969）、全国で初めての請願駅として新幹線三島駅が開設され、東京100km圏内ということもあり、東京への通勤圏内に入った。その後、昭和60年（1985）、東海道新幹線「ひかり号」が三島駅に停車することとなり、市民の生活圏にも大きな変化をもたらした。

現在本市には、東海道新幹線、東海道本線及び伊豆箱根鉄道駿豆線（三島—修善寺間）の3路線が乗り入れており、静岡県下で3番目に乗降客が多い駅となっている。路線バスは、東海バスオレンジシャトル、富士急シティバス、伊豆箱根バスの3社が運行している。

道路では、国道1号が市の東西軸として、国道136号が南北軸として整備されている。さらに、平成26年（2014）2月には市内に5つのインターチェンジを持つ東駿河湾環状道路が開通した。この環状線は新東名高速道路に直結していることから、首都圏へのアクセスがさらに良くなり、自家用車での移動はもちろんのこと直通高速バスの充実した運行など、広域交通の結節点、県東部の中核的都市として三島市は発展を続けている。

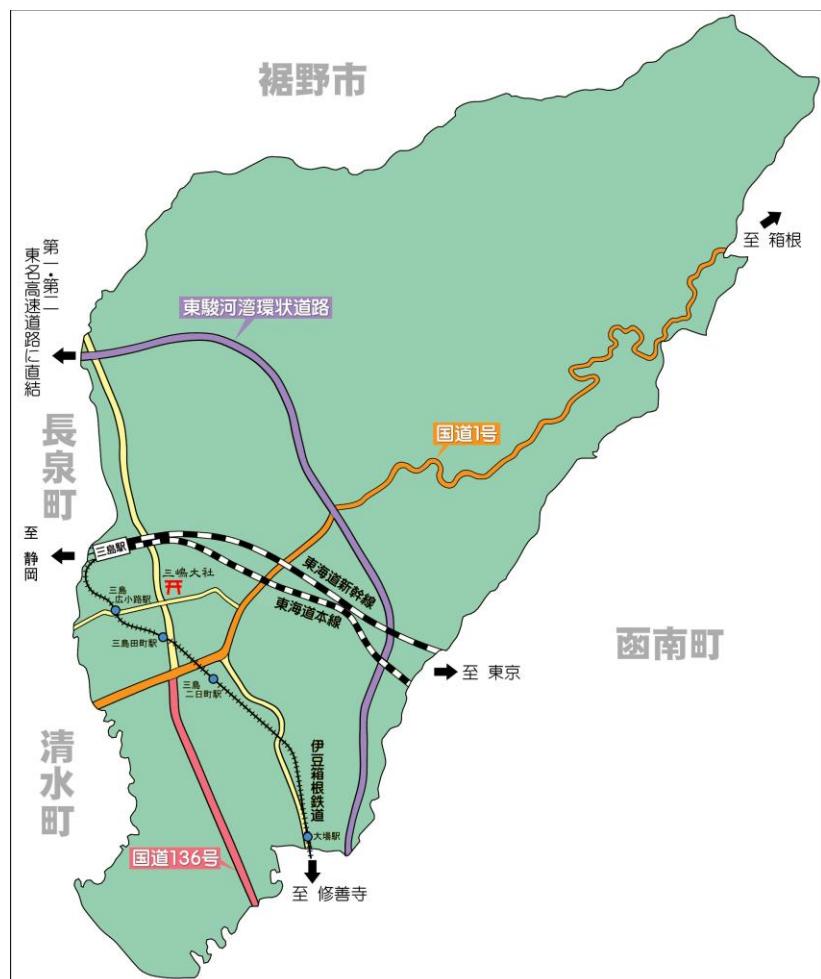
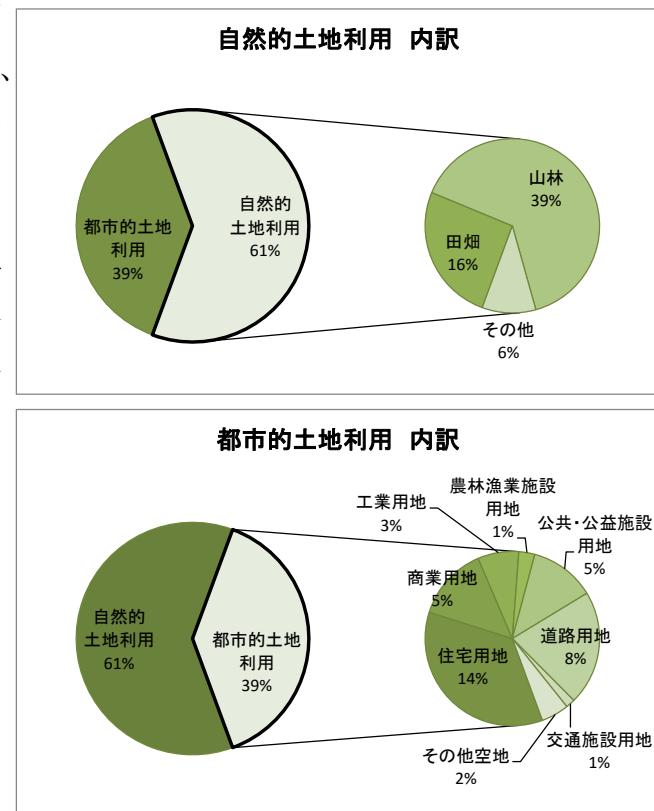


図 三島市内の主な道路網

(6) 土地利用

平成27年(2015)3月現在で三島の面積は62.02km²(面積計測方法の変更により、国土交通省国土地理院公表値は平成26年(2014)に変更された)であるが、昭和10年(1935)の旧三島町の面積は22.38km²であった。昭和10年(1935)に北上村(12.39km²)、昭和16年(1941)に錦田村(18.83km²)、昭和29年(1954)に中郷村(8.21km²)と編入・合併をしていき、現在の広さになった。市域の3分の2は箱根西麓の山間丘陵地で、残る平野部に大半の市民が集中して居住している。可住地あたりの人口密度は2,915人/km²(平成16年3月末現在)と高く、県下でも上位の過密都市となっている。

本市における土地利用状況は下図の通りである。



【資料：平成23年度都市計画基礎調査】

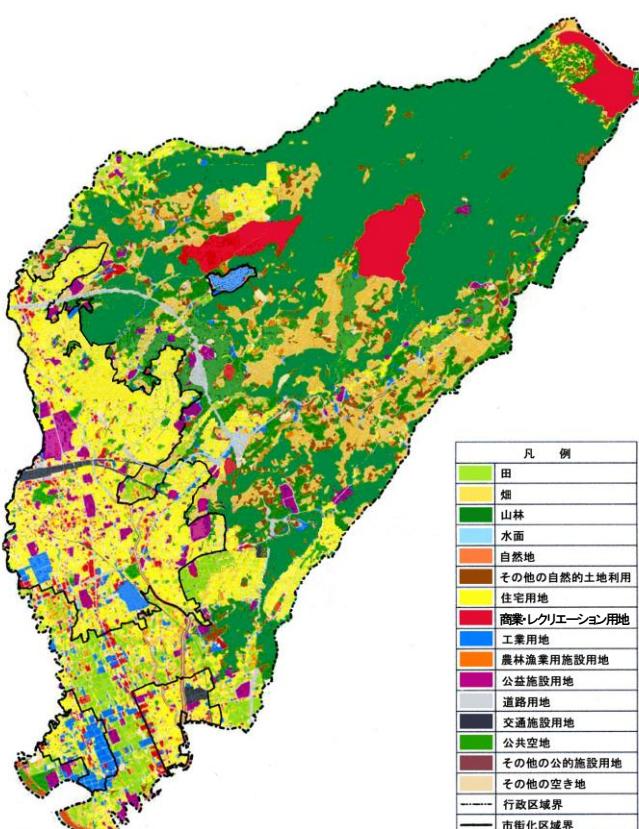


図 三島市土地利用図

(7) 産業 現代までのあゆみ

現在本市では、農業を中心とした第1次産業従事者は約3%であり、製造業、建設業を中心とした第2次産業従事者は約28%、第3次産業就業者は約68%である。

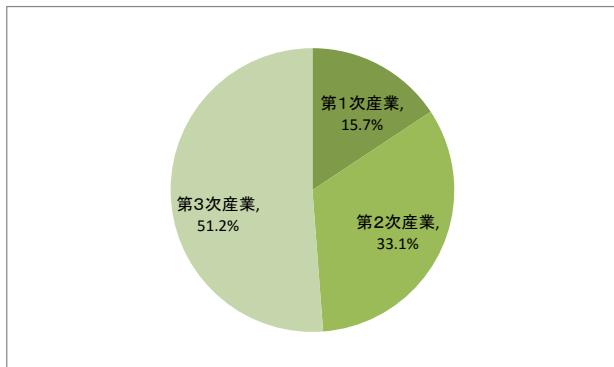


図 昭和35年 産業大分類別

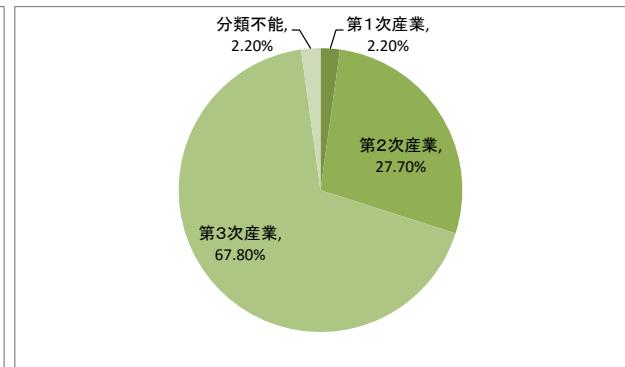


図 平成22年 産業大分類別

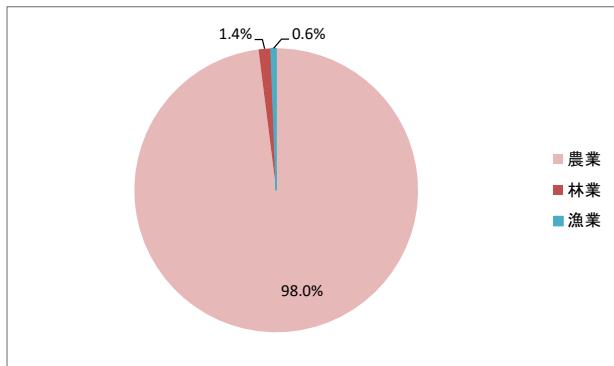


図 平成22年 第1次産業内訳

昭和35年（1960）から平成22年（2010）の50年間での国勢調査結果における推移をみると、第1次産業が13.5%、第2次産業は5.4%、それぞれ減少し、第3次産業就業者割合が増えている。

また、平成22年（2010）時の各内訳はグラフ3つの通りである。

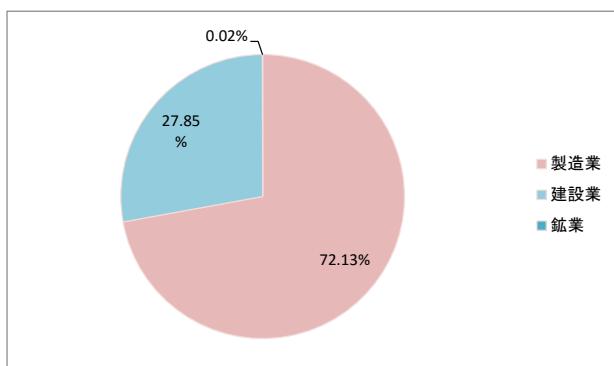


図 平成22年 第2次産業内訤

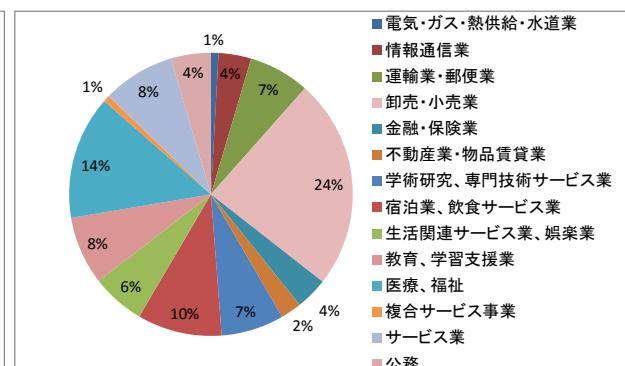


図 平成22年 第3次産業内訤

【資料：三島の統計2015】

さらに歴史をさかのぼると、時勢により産業の姿も変化してきたことが窺える。農業、工業、商業における今までのあゆみの概要は、次のア～ウの通りである。

ア 農業

三島の人々は、弥生時代に境川、御殿川（ごてんがわ）、大場川（だいばがわ）、狩野川の中郷地区を中心に集落を形成し、農耕を始めた。古墳時代から奈良時代にかけてさらに耕作地を拡大し、また土木技術が発達するとともに川から水を引く大規模な灌漑が行われるようになった。特に戦国時代から江戸時代にかけて開墾が行われ、ほぼ現在の水田面積になったという。三島の湧水は低温で、稻の生育には適していなかったが、昭和28年（1953）に中郷温水池（なかざとおんすいち）が設けられ、ここで温められた水が中郷地区の水田を潤す用水となった。平成26年（2014）の三島市のコメ収穫量は1,195tで、中郷地区を中心に作られている。一方、箱根西麓では、明治に入りキャベツ、ニンジンが栽培され始め、明治22年（1889）に東海道線が開通すると、関東関西方面に向けての本格的な産地となり、多種の野菜が栽培されるようになった。斜面を切り開いて作られた畑は火山灰土が積もってできた土地で、耕作土が深く雨が降っても固まらないため、大根などの根菜類は形がよく美味しいと全国的に有名で、高値で取引されている。



写真 昭和10年（1935）代の田園風景

イ 工業

明治初期までは、原料であるモウソウチクやマダケの竹林が広範囲にあり、和傘や竹細工、下駄、曲げ物などの道具造りが盛んだった。また、染物も伝統的工芸のひとつであった。年間を通して15°Cの湧水は、染物に適しており、木綿、麻などの型付けをした布を晒しておくときれいになるため、紺屋が御殿川と桜川の間に20軒ほどあった。

明治に入ると政府の政策により産業育成に資本が投資されるようになり、座織り製糸と呼ばれる小規模の家内制手工業がでりはじめ、明治20年頃には機械化により生産量が増し、三島の人口のうち約15%の人々が製糸業で働くまでになった。



写真 三島和傘の製作風景
(昭和52年)

昭和期には、多くの企業が進出してきたものの、工場の育成や合理化及び市内の環境保持を目的として、昭和42年（1967）設立の三島工業団地と、平成4年（1992）設立の沢地（さわじ）工業団地の2つができ、それら工業団地の移転や技術革新などの時代の流れで、旧市街地の住宅地に混在していた町工場の姿は少なくなった。

従業員数の多い工場では、東レ株式会社三島工場（化学製品）、株式会社電業社機械製作所（各種ポンプ）、東芝テック株式会社三島事業所（各種電子機器）、オムロン株式会社三島事業所（電子部品）、横浜ゴム株式会社三島工場（自動車タイヤ）、森永製菓株式

会社三島食品工場（菓子食品）が挙げられる。

ウ 商業

三島は田方平野の物資の集散地として、また箱根を控えた東海道の宿場町として栄えてきた。特に江戸時代には、三嶋大社を中心に宿屋や商店が軒を連ねていた。しかし、鉄道の発展に伴い宿場町としての優位性を失い、明治以降の急激な近代化に取り残された感があった。昭和9年（1934）の三島駅開設以前は、小規模な形態の店がほとんどだったが、三島駅が開設すると伊豆半島の玄関口として脚光を浴び、商店の形態も徐々に近代化され店頭の装飾も増えた。また、三島の街を壊滅させた昭和5年（1930）の北伊豆震災後には、多くの商店が店頭全面をモルタルや板金で装飾した看板建築の様式で建築された。三嶋大社を起点にして、現在でもその建築様式を見ることができる。

戦後の市街地の買い物客の流れをみると、昭和40年（1965）頃までは、三嶋大社から本町交差点の間が主流であり、今も当時の面影を残している。新しい中心地は徐々に本町から西に進み広小路へと移っていき、現在は、三嶋大社から広小路まで旧国道1号の東海道に沿った通りには、婦人用品店、菓子店、陶器店、うなぎ屋など多くの商店が立ち並び繁華街として賑わっている。



写真 昭和6年(1931)(三嶋大社から広小路方面)



写真 昭和20年(1945)頃(大社から二日町方面)



写真 現在(広小路から三嶋大社方面)

（8）特産品

三島では富士山の湧水を水源とし、水道水もすべて富士山からの地下水を源としているため、その良質の水が、たくさんの名物を生み出してきた。なかでもわさび漬けやうなぎ料理は有名で、それを目当てに三島に訪れる観光客も多い。

また、箱根西麓三島野菜は以前より有名ではあったが、近年、メークインの三島馬鈴薯を使用した「みしまコロッケ」をご当地グルメとしてブランド化し、市内取扱店が増えるとともに、タニタ食堂やコンビニエンスストアなどでの商品化を通して全国展開されている。



写真 三島名物のうなぎ

(9) 三島の名が付く植物

ア ミシマサイコ (セリ科)

8~10月に黄色の小さな花を咲かせるセリ科の植物で、日当たりの良い山野などで見られる多年草。根は生薬で柴胡（さいこ）といい、解熱・鎮痛薬とされる。三島に良質な柴胡が集まり出荷されたことからミシマサイコと呼ばれるようになり、江戸時代には三島土産として広く知られていた。現在では環境省により絶滅危惧II類（VU）に選定されているが、「ミシマサイコの会」などの市民有志により、保全と普及活動が行われている。



写真 ミシマサイコ

イ ミシマバイカモ (キンポウゲ科)

冷たい清流の中だけに育つ多年草水生植物で、昭和5年(1930)に小浜池（こはまいけ）（現楽寿園内）で発見された。糸のように細裂した沈水葉を持ち、直径1~1.5cmほどのウメの花に似た白い可憐な花を水中や水面に咲かせる。昭和30年(1955)代に湧水が減少し絶滅してしまったが、平成7年(1995)に「三島ゆうすい会」、「グラウンドワーク三島」、「柿田川みどりのトラスト」の協力を得て、清水町柿田川に自生するミシマバイカモを「三島梅花藻の里」に移植し、市内の河川に再びよみがえらせ、現在では多くの市民や行政、企業が、ミシマバイカモを絶やさぬよう、その生育に携わっている。



写真 ミシマバイカモ

ウ ミシマザクラ (バラ科)

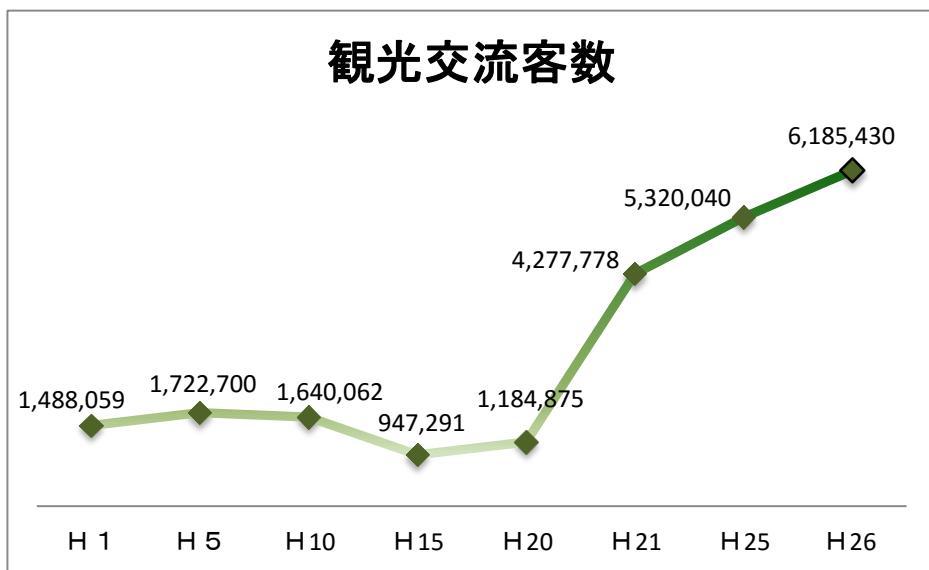
国立遺伝学研究所の竹中要博士が、ソメイヨシノの起源を研究した過程で生まれ、花はわずかに赤みを帯びた白色で、オオシマザクラに似ている。三島で生まれ、ミシマザクラと命名されたこの花は、市制30周年（昭和46年、1971）を記念し「市の花」に指定された。現在では三島大社境内や市内公園「緑と水の杜」などに植えられており、国立遺伝学研究所では一般公開日（毎年4月）に見ることができる。



写真 ミシマザクラ

(10) 観光交流客

三島市は、宿場町として発達してきたまちであり、現在も小売業やサービス業を含む第3次産業の従事者が多く、観光交流客数と地域活性化は密接な関係にあるといえる。伊豆の玄関口であるという地理的要因や三嶋大社などの観光資源があることに加え、街の整備や特産品の積極的なPR活動の成果として、年々観光交流客数は増加している。



観光交流客数推移（上記グラフ）から、観光交流客（観光レクリエーション客数及び宿泊客数）は平成15年度（2003）に一旦は落ち込んだものの、平成20年度（2008）にかけて増加傾向になり、さらに平成21年度（2009）では三嶋大社への参拝者数とせせらぎルート来訪者数を取り入れ、より実態に沿った統計に切り替えたことによって一気に上昇し、その後も順調にその数は伸び続けていることが窺える。なお、平成26年度（2014）の観光交流客数は約618万人である。

近年では、平成26年（2014）に新東名高速道路直通の東駿河湾環状道路が開通、平成28年（2016）3月には笛原山中（さきはらやまなか）バイパスが開通するなど広域交通網の整備が進み、併せて箱根西麓エリアに伊豆フルーツパークや人道専用として日本一の長さの箱根西麓・三島大吊橋などのレジャースポットが登場し、これらが観光交流客增加の要因となっている。



写真 箱根西麓・三島大吊橋

また近隣状況としては、平成25年（2013）に富士山が、平成27年（2015）には茎山反射炉がそれぞれ世界文化遺産に登録された。さらに伊豆半島が平成24年（2012）に日本ジオパークに登録され、これらは、国内のみならず世界中から注目を浴び、外国人観光客の増加につながっている。

2-1 三島市の歴史

(1) 原始・古代における三島市の形成

ア 旧石器時代

三島市における、最も古い人々の生活の痕跡は、旧石器時代にまでさかのぼることができる。今から約3万4千年前の地層から石器が発見されており、また、箱根丘陵部に位置する初音ヶ原（はつねがはら）遺跡からは約3万1千年前と推定される土坑が60基発見されている。これは集落間の共同作業を想定する日本最古のものであり、深さ約1.8m、坑の直径は約1.4mで約7~14m間隔に台地に沿って弧状に並んでいた。この土坑はシカなどの動物を追い込んで捕獲するための落とし穴などであろうと考えられている。



写真 初音ヶ原遺跡 土坑

イ 繩文時代

土器が出現し、食糧を煮炊きして保存する技術が普及すると、人々はより生活条件の良い場所に住み集落を営むようになった。今から約1万3千年前ほど前からはじまる縄文時代の頃の遺跡は、三島では箱根西麓の尾根に多く見られる。この辺りの遺跡からは竪穴住居跡や縄文式土器、石器が発見されているが、特に千枚原（せんまいばら）遺跡では敷石住居跡が確認された。敷石住居とは石を敷いた祭壇をもつ住居のことであり、発掘当時においては全国的に類例の少ない珍しいものであった。また、観音洞遺跡でも敷石住居跡が発見されているが、この遺跡からはさらに、特殊な形狀の土器も出土している。吊手土器と称されるこの土器は、住居内における照明具や祭祀用具として、内部に脂を入れて使われたと考えられる。なお、千枚原遺跡は昭和46年（1971）に、三島市の指定史跡となっている。



写真 観音洞遺跡 敷石住居跡



写真 観音洞遺跡 吊手土器

ウ 弥生時代

稻作は縄文時代の晚期からすでに見られるものであるが、三島で稻作の遺跡が見られるのは約1世紀前半頃からである。これはすでに弥生時代の区分にあたるが、御殿川流域・

境川流域の中郷地区の低湿地からいくつかの水田跡や集落跡が発見されている。

長伏六反田（ながぶせろくたんだ）遺跡からは、弥生時代中期の方形周溝墓 18 基が発見された。これは、一度に発見される方形周溝墓の数としては極めて多く、この時代長伏の地において、有力な一族が繁栄していたことが窺える。また、御殿川中流域に位置する奈良橋向・西大久保遺跡では、水田跡、住居跡、祭祀場跡が併せて発見され、弥生時代の北伊豆集落の様子が分かる遺跡として注目されている。



写真 長伏六反田遺跡 方形周溝墓群全景

エ 古墳時代～奈良・平安時代

米作りによって、富の偏りが生じるようになると、多くの富を貯えることができた権力者は、地域の首長として古墳を築くようになった。三島市には、3世紀後半～6世紀前半につくられたと考えられる向山（むかいいやま）古墳群や、7世紀頃につくられた夏梅木（なつめぎ）古墳群がある。向山古墳群は円墳 14 基、前方後円墳 2 基の合計 16 基からなる古墳群で、その規模や出土遺物の内容、特に初期前方後円墳を有していることから、ヤマト王権との関係を知る上で重要な古墳群といえる。また、駿河・伊豆地域の古墳文化を考える上で最も重要な古墳群であるとして、平成 11 年（1999）に県の指定文化財となり、その後平成 16 年（2004）に新たに発見された 16 号墳は、平成 28 年（2016）に追加指定となった。



写真 向山古墳群



写真 向山古墳群 3号墳

奈良時代になり天皇を中心とした中央集権国家が成立する中で、各地を統治するために中央から国司が諸国に派遣された。この国司が地方を管轄するための役所を国庁といい、三島の地に国庁が置かれた。その所在地については、昭和 30 年代に大規模な掘立柱建物跡や布目瓦が検出されたことから芝本町（しばほんちょう）（鷹部屋遺跡）とする説と、平成 2 年（1990）に 8 世紀前半の遺構群が検出されたことから大社町本妙寺付近（上才塚遺跡）とする説がある。三島ははじめ駿河国に属していたが天武天皇 9 年（680）に駿河国から分かれて伊豆国となった。この時代に設定された条里制は日本古代の土地管理システムであり、おおむね郡ごとに、耕地を 6 町（約 650m）間隔で縦横に区切り、この 6 町四方の 1 区画を「里」と呼び、里の列を「条」と呼んだ。国府一帯はこの規則に従い、碁盤の目

のように整然と東西南北に走る道で区切られていた。これは国ごとに設定されていたようであり、駿河国にあたる境川以西では、伊豆国とは方向の違う地割りとなっていることが確認できる。現在、中郷地区の水田地帯には当時の伊豆国の条里の跡を見ることができる。

三島は駿河国東端と接しているため、伊豆国の中端の地にありながら、国府として、また信仰の地として栄えた。6世紀に仏教が伝来し、国の仏教化政策が盛んになると、三島の地においても、寺院（市ヶ原（いちがはら）廃寺、塔ノ森廃寺、天神原廃寺）が建立された。また奈良時代は、聖武天皇の勅命により、官寺の国分僧寺・尼寺が国ごとに建立されており、伊豆国の中端の地にあたる三島にも国分僧寺・尼寺が創建された。

発掘調査によって国分僧寺は、三島市泉町一帯であることがほぼ確定された。10世紀前半にはすでに火災で焼失しており、山興寺（塔ノ森廃寺）が代用国分僧寺にあてられたとされる。現伊豆国分寺の本堂裏には塔の礎石が8基残っており、昭和31年（1956）に国の史跡に指定された。

また、国分尼寺は伊豆国分寺と三嶋大社の間に位置する鷹部屋遺跡に存在したという見解が有力である。承和3年（836）に火災で焼失したのちは、三嶋大社の南側にあった大興寺（市ヶ原廃寺）が官寺である定額寺となり代用国分尼寺にあてられたとされる。同地の仏寺として大興寺から変遷し現在は祐泉寺が建つ。その祐泉寺境内には市ヶ原廃寺の塔心礎が置かれており、昭和41年（1966）に三島市の文化財に指定された。

歴史が文字で記録されるようになった古代においては、当時の人々の生活ぶりは様々な文字史料から推測することができるが、発掘調査によって発見された遺物からも同じく暮らしの痕跡は再構築できる。奈良・平安時代の三島の人々の暮らしについても同様であり、特に御殿川流域の調査では、漆塗りの椀、曲物、桶、柄杓、下駄、櫛など、当時日常的に使用されたであろう木製品が大量に出土している。また、中郷地区の箱根田遺跡からは、土器に人の顔を墨で描いた「人面墨書土器」が12点出土した。このほか人形木製品、土師器、木簡、馬や牛の骨などの多様な遺物と、流路跡・掘立柱建物の遺構が検出され、これらは祓えの儀式や呪術的な祭祀に用いられた。古代では、土器や人形木製品に疫神などを墨書して、これに穢れを封じ込め



写真 伊豆国分寺跡 塔礎石



写真 市ヶ原廃寺 塔心礎（祐泉寺）



写真 箱根田遺跡 人面墨書土器

て川に流して祓ったと考えられている。こうした遺物からは当時の人々の心意を知ることができる。

（2）中世、三嶋大社の門前町としての形成と発達

現在の三嶋大社という社名は、貞觀11年(869)に完成した『続日本後紀』にも見られ、その後、伊豆三嶋神社（『延喜式』）、三嶋社（『吾妻鏡』、北畠頸家文書、北條氏綱文書）、三嶋宮（『矢田部家文書』）とも呼称されるが、一般には三嶋大明神と称され、伊豆国において第一位の社格をもつ一宮として朝廷からも篤く崇敬されていた。

伊豆国には、奈良時代に最も重い流罪である遠流の国に定められてから、朝廷に背いた罪人が送られてきた。鎌倉幕府を開いた源頼朝も流人のひとりとして伊豆国北條蛭ヶ小島で20年に及ぶ流人生活を送っている。この間、頼朝は源氏の再興を願って三嶋大社へ祈願に通った。三島市には、間眠神社や妻塚、手無地蔵など、頼朝にまつわる史跡や伝承が多く残っている。

鎌倉幕府の政権が安定すると、頼朝は三嶋大社一帯の整備に着手した。境内地を南に広げ門前に延びる下田街道をほぼまっすぐにし、門の神として右内・左内各神社を整備している。また、この頃から門前で市が立ち始めるようになり「市ヶ原」や「二日町」の地名として現在に残っている。鎌倉時代を通じて三嶋大社は幕府崇敬の神社となり、武士たちの間では特に伊豆山権現、箱根権現とともに詣でる「三所詣」が盛んとなり、多くの人々が頻繁に三島を往来するようになった。当時の街道は、近世に整備された東海道より北側に敷かれた道筋を通り箱根を越えるものであった。現在は平安鎌倉古道と称しているが、かつては箱根路と呼ばれていた。もとは、古来より使用された足柄路が、延暦21年(802)の富士山の噴火により使用できなくなったため新たに設けられたものであり、後には両路ともに用いられるようになった。箱根路は険しいが近道である、という理由から利用される場合も多かつたという。鎌倉時代の女流歌人である阿仏尼は、その著『十六夜日記』の中で、あえてこの箱根路を選んで通ったことを記している。

鎌倉仏教の一つである時宗の開祖、一遍上人は全国を遊行して多くの人々の教化につとめた僧である。この一遍が、弘安5年(1282)の秋に三嶋大社を訪れた様子が「一遍上人絵伝」に描かれている。この中で三嶋大社は、白壁、朱塗り柱、檜皮葺の社として描かれており、また、参詣者の様子や門前の賑わいなど、鎌倉時代当時の社殿の姿や人々の風俗も知

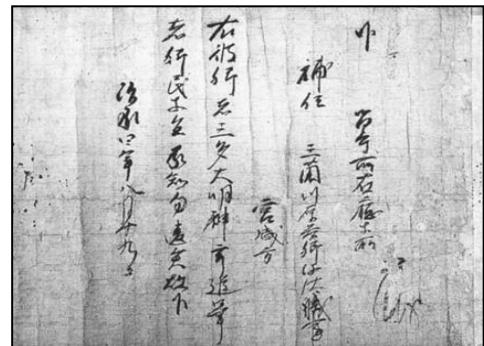


写真 源頼朝下文（矢田部家文書）



図 一遍上人絵伝 三嶋神社参詣の図

ることができる。三嶋大社への崇敬は後代の將軍や武家たちにも引き継がれ、所領や刀などが寄進されるなど三嶋大社は廃れることなく維持され続けた。門前町である三島もこれに伴い賑わいを見せることになり、三島は頼朝によって、伊豆の政治・経済・信仰の中心としての基礎が築かれたともいえる。

(3) 近世、宿場町としての形成と発達

江戸時代になると、徳川幕府は人の移動や物流の便を図るために、五街道の宿駅の設置や一里塚、松並木といった街道に付属するものの整備を行った。宿駅は旅人に宿泊施設を提供し、荷物運搬に必要な馬や人夫を継ぎ立てる設備をもつ場所である。鎌倉時代以降発達し、交通・経済上の地方的中心ともなった。

江戸時代、東海道筋の宿駅である三島は、街道起点の日本橋から 11 番目の宿場町として賑わうようになった。江戸末期の天保年間の記録によると、三島宿の施設は、宿役人が事務を執る問屋場が 1 軒、大名・公家・役人などが宿泊する本陣が 2 軒、脇本陣が 3 軒、一般の旅人が宿泊する旅籠が 74 軒あった。

問屋場は宿中心部の最も賑やかな一帯にあり、運送及び宿場全般の事務を兼ねた業務を行っていた。建物の北側には人足小屋や馬小屋が建ち、荷物の継ぎ立てが行われ、人足の休憩所ともなっていた。三島宿では初め 36 人 36 頭の人馬常備が義務づけられていたが、後には 100 人 100 頭に加算された。三島宿が荷物などを継送する宿継ぎの範囲は、西は沼津から、東は小田原までであったが、ここには箱根八里が含まれており、人夫や馬は険しい山坂を往復しなければならなかつた。そのため、たとえ頑健な馬であっても疲労が重なり、長期にわたる使用は難しく、馬不足が問題となっていた。この不足は近隣の村落に助郷として応援の人馬を負担させて補つたが、大大名の往来時などには奥伊豆など遠隔地からも人馬がかり出されることもあり、大変な負担として農村疲弊の一因ともなつた。

三島宿はまた、交通の分岐点でもあった。三嶋大社から南へ伊豆半島を貫くように下田街道が伸び、江戸や上方からの情報や物資の多くは三島を経由して伊豆の各村にもたらされた。また三嶋大社の西側からは北へ佐野街道（甲州道）が伸び、御殿場方面への重要な交通路となっていた。

三島宿の本陣は一の本陣である世古家と二の本陣である樋口家の 2 軒が長く勤めていた。本陣へ大名たちが宿泊するのは、参勤交代の時期である 4~6 月に集中していた。諸侯が宿泊する 2~3 ヶ月前には、あらかじめ宿泊者の人数や日取



図 東海道五十三次三島宿 安藤広重版画



写真 関札

りを報せる「先触」が到来して予定が組まれる。大名が到着する時には、本陣の正面と玄関に大名家の家紋を染めた幕を張り、門前には大名家の名が記された「関札」が掲げられた。このような歓迎の準備も大名の格式により異なったという。

当時、難所である箱根山を越えるためには丸1日かかったため、三島で宿泊する旅人は多く、旅籠が軒を連ねていた。三島宿には江戸時代を通じて70~80軒ほどの旅籠があつたようである。中には「飯盛女」を置く宿もあり、これは「三島女郎衆」として知られている。

当時、遠方から東海道を旅してきた人々に人気のあった土産物に「三島暦」がある。これは山城国（現京都府）から三島に下ってきたと伝えられる河合家が日々発行してきた暦で、関東地方の地方暦としては最も古いものといわれている。その刷りの美しさや線の細やかさで全国に知れ渡っていた。

江戸時代初期においては、徳川将軍が東海道を往復することもあり、3代将軍家光は三島に宿泊所として御殿を築かせた。しかし、これ以降、幕末まで将軍が上洛することはなくなり、御殿の建物も取り壊されたという。将軍の上洛が再び実現したのは、江戸時代も末期のことである。14代将軍家茂は朝廷との交渉のために大軍を率いて上洛した。そして、この家茂との婚姻で江戸へ下向する和宮のため、東海道では大改修がなされた。本陣や箱根西坂の石畳も大々的に手入れされたが、実際には和宮は中山道を使い江戸へ入った。ただ樋口本陣の記録によると、膨大な道具類や和宮に仕える一部の女官達は東海道を通り江戸に入ったという。

江戸時代、三島は幕府直轄の天領として三島代官の支配に属していたが、後の幕政改革に伴い、三島代官は蘿山代官に併合され、江川代官の支配となった。三島代官役所の跡地には三島陣屋が設置され、民政・警察の事務を取り扱っていた。江戸末期になると、世情不安は街道筋にも蔓延し、代官江川英龍（坦庵）は幕府の常備軍を補うために農兵隊を提唱した。息子の江川英武の代になり、国の治安を目的として農兵が許可され、三島陣屋においてその訓練が行われた。農兵は豪農の次男、三男を中心に構成され、その拠出金によって運営されたという。

大政奉還を受け世の中が騒然となると、三島宿周辺では、幕臣・幕府恩顧の人々が官軍に恭順の誓詞を出し、治安維持の任を命じられた。蘿山代官江川英武も桑名（三重県）まで赴き、明治政府に恭順の意を示したため、旧領を安堵されて東海道の治安を任せられた。また、三島大社宮司矢田部盛治も明治政府に忠誠を誓い、自ら神社関係者で組織した伊吹隊を率いて、駿府その他の警備にあたった。

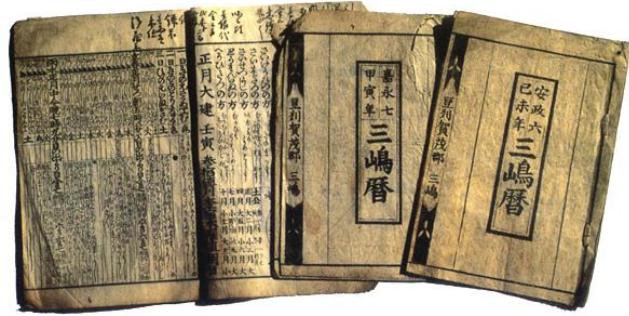


写真 三島暦

(4) 近代の形成と発達

維新後、三島宿は韮山県に属し、明治4年(1871)に足柄県、同9年(1876)より静岡県に属した。そして、明治22年(1889)市制・町村制の施行に伴い、君沢郡「三島町」が誕生した。

明治時代になると、問屋場、本陣、脇本陣、飛脚は姿を消し、運送会社、郵便局、優良旅館組合の看板を掲げる旅館などが現れた。行き交う人々も洋装に変容、西洋人も往来はじめ、多くの人力車の姿が見られるようになるなど、街道の風物にも変化があらわれた。明治当初はまだ、人々は徒歩や駕籠によって箱根山を越えており、東京と上方を往来する人々は一層増加して、三島には毎日多くの旅客が溢れていた。しかし、明治22年(1889)7月に新橋一神戸間を走る鉄道路線(東海道線)が開通すると、わざわざ徒歩で箱根越えをする旅人はほとんどいなくなった。東海道線は三島をはずれて、御殿場経由で開通したため、三島は寂れて旅籠の宿泊客も激減、次々と転廃業を余儀なくされてしまったのである。

そこで、地域振興を目的に、大正8年(1919)に野戦重砲兵第二連隊を、翌9年(1920)に第三連隊を誘致し、三島町北部に設営した。この結果、道路が整備され交通事情も改善、さらに、連隊に食品や軍服などの商品を納入する商店も増え、町は活気を取り戻した。休日には軍人が町を歩き、飲食店、写真館、映画館、土産物店で三島の町は賑わいを見せていた。こうして大正時代の三島は軍都として発展していくことになった。

昭和に入ってからも三島町は北伊豆の中心地として繁栄していた。呉服店などの商店が久保町通り(旧東海道)や市ヶ原通り(下田街道)に並び建ち、多くの買い物客が集まった。また、伊豆一円から来た奉公人たちは商人や職人として住み込み、商売や技術を覚えて独立していった。三島は昭和30年代まで、伊豆の商人・職人を養成、供給する土地でもあったのである。

ところが、昭和5年(1930)11月26日早朝に発生した大地震により、三島町は大打撃を被った。北伊豆地方を中心に襲った北伊豆震災により三島町は、死者25人、負傷者294人、全壊家屋3,021軒に及ぶ甚大な被害を受けたのである。三

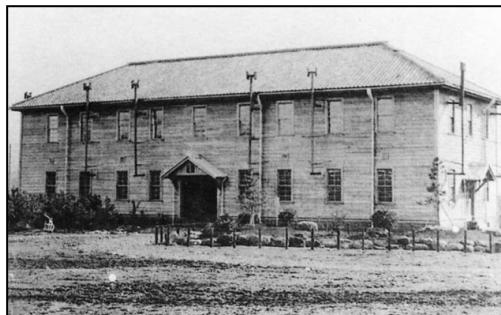


写真 第二連隊兵舎



写真 北伊豆震災による三島町の被害状況



写真 復興後の三島町 (久保町通り)

三島市歴史的風致維持向上計画 第1章

島町役場や三嶋大社をはじめ、学校や寺院、多くの商店などの建物が倒壊した。この震災から3年をかけて、三島町は復興事業を展開した。旧東海道である国道と下田街道の道幅が広げられ、歩道を増設した。倒壊した家屋は低利の融資を受けて次々と建て替えられた。小学校も新築され町役場も建て替えられて、洋風モダン建築に一新された商店が建ち並ぶまちの姿に再生したのである。

昭和9年（1934）12月、三島町民が長年待ち望んでいた東海道線丹那トンネルが開通し、三島駅が開業した。東海道線はそれまで御殿場経由であったが、箱根山に丹那トンネルが開通したことにより東京、横浜との距離が近づいて多くの人が三島町を訪れるようになった。それまでは、現在の下土狩駅から発着していた駿豆鉄道も、この時三島駅に接替えられ、伊豆の玄関口となったのである。



写真 昭和9年(1934) 開業の日の三島駅

三島町は昭和10年（1935）に北上村、昭和16年（1941）に錦田村と合併して、三島市となった。静岡県下で6番目、全国で180番目の市政施行であった。この年の12月に、日本はアメリカ合衆国に宣戦布告をし、三島市も急速に戦時色を強めてゆく。戦中大きな空襲を受けなかったため、市内の被害は他市ほど多くはなかったが、終戦間近の頃、公共建物を戦災から守るため、市役所周辺の多くの建物が強制疎開で取り壊された。

昭和20年（1945）に戦争が終わると、三島駅は戦場からの復員者や大陸からの引き揚げ者でごった返し、三島駅前などにはヤミ市が立ち、不足している食料・物資を求める人々で賑わった。また、アメリカ軍が楽寿館などに駐留し、連合軍の支配下に置かれた。この後、時代とともに新しい市へと生まれ変わっていくことになる。特に旧野戦重砲兵第二連隊跡地での日本大学三島予科の開校は、文化都市への第一歩として広く市民に歓迎された。このほか、静岡大学教育学部、鉄道教習所、三島簡易裁判所、検察庁、北小学校、市立第二中学校（現北中学校）が次々と移転あるいは新設され、かつてイチョウ並木を闊歩した軍人は姿を消し、新しい時代の到来を感じさせた。

また、三島には江戸時代の宝暦11年（1761）に鋳造され名勝の一つとして市民に親しまれてきた「時の鐘」があったが、戦争中、大砲や軍艦の原料として供出され失われていた。終戦から5年後の昭和25年（1950）、三島の名物を永久に保存するとともに平和の象徴として有志により再建された。

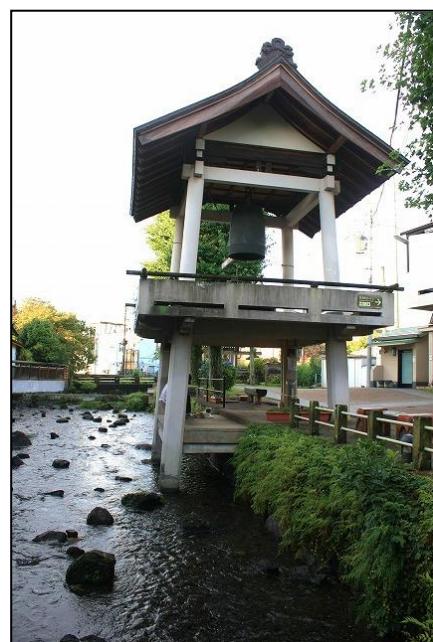


写真 現在の「時の鐘」

(5) 現代、せせらぎのまち への形成と発達

現在に続く三島市のなかたちになったのは、中郷村と合併した昭和29年（1954）4月のことである。この頃には戦争直後の混乱期から徐々に抜け出し、国民の暮らしにも生活改善が行われ、便利な電気製品が家庭に入り込んできた時期である。三島市では、久保町商店街（現中央町）にアーケードができ、小中島（現本町）においてもアーケード組合創立総会が開かれ、市全体が活気づいた。

昭和37年（1962）、清潔で住みよい郷土三島を目指して全国初の「交通安全都市、環境衛生都市」宣言をしたが、昭和39年（1964）になると、石油化学コンビナート進出問題が発生した。湧水の枯渇や大気汚染などの公害問題が提議され、市民の反対運動の高まりから市議会も進出阻止を決議した。

昭和40年代の高度経済成長期には、三島工業団地造成、国道下田バイパス開通、新幹線三島駅開業など工業・交通が一気に発展し、全国の経済状況と並行し安定成長期に入っていく。一方で、湧水は昭和36年（1961）頃から枯れはじめ、昭和37年（1962）4月に枯渇した。加えて生活様式の変化により合成洗剤などの家庭雑排水が河川に流入、流れが一段と悪化し、悪臭も目立っていた。そこで、市は昭和51年（1976）、清流を取り戻すために単独公共下水道として供用を開始した。当初は事業費の不足に加え市民の関心も薄く、水洗化率の低い多難なスタートであった。ところが、昭和58年（1983）に、再び湧水が年々減少し清流が失われゆく状況下でありながらも、全国30余の候補地の中から、三島市は国土庁の事業「水緑都市モデル地区」に指定された。この出来事は、水の復活を願う市民運動が加速する一つのきっかけとなった。昭和59年（1984）、三島市観光協会が発足すると、翌年には新幹線「ひかり号」が停車することになり、その翌年には市制45年を迎える、人口10万人に達成した。

平成に入ると、かつて豊かな水が溢れていた時代を知る市民により「三島ゆうすい会」が設立され、水環境に関する活動がより盛んとなった。行政の事業においては源兵衛川（げんべえがわ）親水公園をつくり、桜川の水辺に文学碑を建てるなど、せせらぎのまちとしての整備が進んだ。こうした行政・市民の河川・緑地の美化運動により、平成7年（1995）、三島市は、国土庁より「水の郷百選」に認定され、現在に至るまで、せせらぎに関する活動や事業が多く展開されている。



写真 石油コンビナート進出反対運動



写真 三島駅前



写真 宮さんの川(蓮沼川)／楽寿園南出口

2-2 三島市の文化

(1) 無形民俗文化財

ア お田打

年の始めに際し、神前で稻作りの過程を模擬的に演じる儀式を「予祝儀礼」という。これは、神にあらかじめ稻作過程を見ることによって、その年の豊作を祈るという意味合いをもつ民俗儀礼である。三嶋大社に伝わる「お田打」はこの予祝儀礼と芸能が結びついた「田楽能」に分類される神事で、その始まりは鎌倉時代とも室町時代ともいわれている。これは、各地で見られる「田遊び」「お田植祭」などと同種のものである。お田打は毎年正月7日に三嶋大社境内中央の舞殿で奉納される。舞殿の中央に水田に見立てた薄縁（裏をつけ、縁をつけた筵）を敷き、そこでの舅の「穂長」と婿の「福太郎」の対話を通し、「田まわり」「苗代打ち」「水口びらき」などの所作を行うことにより進められる。穂長役は翁の白仮面、福太郎役は翁の黒仮面をそれぞれ被り、神事の最後には参会者に餅が投げられて終了となる。昭和47年（1972）、県指定無形民俗文化財となっている。



写真 お田打

イ 三島囃子（みしまばやし）

例年8月15日～17日にかけて催される三嶋大社例大祭に伴う三嶋大祭りでは、市中に繰り出す屋台の上で「しゃぎり」が行われる。現在、県の無形民俗文化財に指定されている「三島囃子」は、この夏まつりに行われるしゃぎりとお囃子を総称したものである。その伝来については、戦国時代にあたる天文年間（1532～1555）に、三嶋大社の舞々役であった幸若與惣太夫（こうわかよそうだゆう）によって現在に伝わる原型がつくられたとされている。また、天正11年（1583）に北条氏から差し出された文書からもその存在は確認できる。この文書には、川原ヶ谷郷（かわはらがやごう）、谷田郷（やたごう）、大場郷（だいばごう）、梅名郷、柿田郷（かきたごう）に対して「先の御代から定められている三嶋宮の御囃子が滞っていることはよくないので、これからは励むように」とある。この後、農村の若者たちの中で受け継がれ、近世以後の祭りの民衆化とともにさらに普及・拡大して、三島市中で



写真 三嶋大祭り 三島囃子

も演じられるようになった。400 有余年の間、楽譜は存在せず、人から人へと伝えられてきた。昭和 42 年（1967）に三島市の無形文化財（当時の名称）になり、平成 3 年（1991）には静岡県の無形民俗文化財に指定された。

ウ 農兵節

「富士の白雪やノーエ」で始まる農兵節は、三嶋大祭りのパレードで踊られるなど、三島市民には最も身近な民謡である。

その起源については 2 説あり、幕末の頃、韋山代官である江川英龍（坦庵）が創設した農兵調練の行進曲として用いられたとこことに始まるという説と、文久 2 年（1862）に横浜で作られた「野毛山節」が三島に伝わり農兵節となったという説がある。

大正末頃、三島の花柳界は、三島に駐留する第二・第三の野戦重砲兵連隊の軍人たちで賑わっており、そこで「ノーエ節」が盛んに唄われていた。そのノーエ節を幕末の三島で行われていた農兵調練にちなみ「農兵節」と改め、全国にその名を知らしめたのは、昭和初期の平井源太郎の宣伝活動の賜物である。三島出身の平井源太郎が、箱根西麓地区の野菜を売り出そうと農兵節と書いた幟を立て、韋山笠、陣羽織、腰には大・小刀という人目を引く出で立ちで、小田原、品川、大阪などで盛んに農兵節と踊りを披露していたところ、大阪市場の開拓に成功し、大根をはじめとする野菜が「坂もの」として関西に出荷されるようになった。

農兵節は、昭和 9 年（1934）にはコロムビアレコードから赤坂小梅の唄で、同年新太陽レコードでも三島の芸者十郎の唄で、それぞれ発売された。大根の宣伝と農兵節という組み合わせは、街頭宣伝とレコードやラジオの普及により全国的に有名になった。昭和 34 年（1959）には、農兵節普及会によって歌詞、踊曲の整理が行われて、現在のかたちが完成し、今では三嶋大祭りで踊られるなど三島の民謡として踊り継がれている。



写真 三嶋大祭りでの農兵節を踊る様子



写真 農兵節 レコード

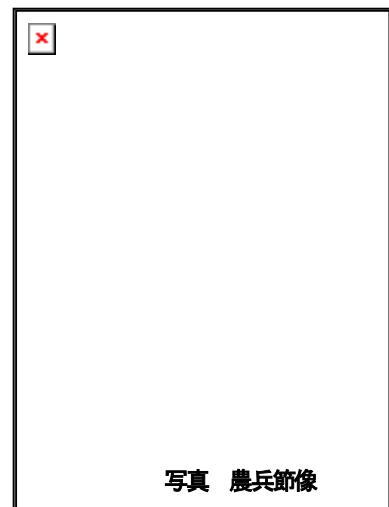


写真 農兵節像

写真 農兵節像（JR 三島駅北口）

(2) 代表的な文化・研究施設

ア 佐野美術館

佐野美術館は、三島出身の実業家佐野隆一氏が私財を投じて、昭和41年（1966）に開設したものである。佐野氏は湧水の豊かな地に回遊式庭園を、さらに隣接して美術館を建て、長い間収集した各種の美術品が広く市民に活用されることを願い、財団法人佐野美術館に寄贈した。収蔵品の特色は、その多彩さにあるが、特に日本刀や薙刀には名品が多く、刀剣類の収集では東洋一ともいわれている。「備前国長船住人長光造」銘の薙刀は国宝に指定されている。また「長元」銘の太刀をはじめ7口の刀が国指定の工芸品であり、国指定彫刻の木造大日如来坐像を所有している。このほか青銅器、陶磁器、金銅仏、古鏡、古写経、日本画、能面など、東洋の工芸品を中心に、それぞれ系統立てて収集されたものが収蔵されている。展示会は、美術館独自のコレクションを公開する企画展と、幅広い分野にわたる特別展などが開かれている。



写真 佐野美術館 入口

イ 国立遺伝学研究所

国立遺伝学研究所は、遺伝学に関する基礎的研究と遺伝学の指導、促進を目的に、昭和24年（1949）に文部省（現文部科学省）の所轄機関として設置された。東京に比較的近く、実験圃場に適する広い土地があったという理由から、三島市が選ばれた。研究所内に設立された日本DNAデータバンクは、欧米のDNAデータバンクと連携して、塩基配列データベースの世界共同構築を進めている。当初は3研究部で発足したが、昭和59年（1984）には、大学などの研究者と広く共同研究を行う大学共同利用機関に改組され、17の研究部門と6つの研究施設が置かれた。昭和63年（1988）には、「総合研究大学院大学」が設置され、大学院生の教育にも協力している。構内には研究のために260種余りの桜が400本近く植えられている。また、研究所前の市道の両側にも植えられており、桜の名所として市民に親しまれている。「三島市の花」であるミシマザクラは、この国立遺伝学研究所でソメイヨシノの起源を知るための研究過程において、生み出されたものである。



写真 国立遺伝学研究所

(3) 代表的寺社

ア 妙法華寺

妙法華寺は日蓮宗本山で、日蓮上人第一の弟子である大成弁日昭上人によって、およそ700年前に鎌倉に建てられた。その後、越後、伊豆加殿村を経て、元和7年（1621）、現在地である三島市玉沢（たまざわ）の地に遷った。この移転には、徳川家康の側室で水戸光圀の祖母にあたる養珠院お万の方、英勝院お勝の方、そして、江戸城を築いた太田道灌の子孫にあたる資宗らによる協力が大きかったという。

当時は、総門、仁王門を経て鐘楼、五重塔、祖師堂などおよそ240棟の建物が建ち並ぶ雄大壯麗な景観を誇ったというが、寛政3年（1791）の大火により、わずか数戸の建物を残してほとんど焼失してしまった。現存の伽藍は百数十年前に、第41世日桓上人により再建されたという。

現在は、重厚な石垣に名勝百間塀を巡らした昭光門、法殿、祖師堂、大書院、大庫裡、宝物館、さらに駿府城内にあったお万の方の居間を移築した奥書院などが、スギやマツの古木に囲まれた、およそ2万坪の境内に建ち並んでいる。

所蔵品としては、鎌倉時代の「日蓮上人説法図」や「絵曼荼羅」、日蓮上人自註の「註法華経十巻」や自筆の「撰時抄五巻」などの国指定の文化財がある。



写真 妙法華寺 昭光門

イ 龍澤寺

龍澤寺は臨済宗妙心寺派の寺で、白隱禪師により宝暦11年（1761）に開山された。境内には本堂、庫裡、禪堂、經堂、鐘楼、不動堂、開山堂などが建っており、このうち經堂及び山門は、江戸時代の豪商白木屋の寄進であると伝えられる。龍澤寺住職は代々老師と称し、多くの雲水（禪宗の修行僧）の修行を導くとともに、全国から各界名士の来訪を受け、仏法の教えを説いている。特に初期の白隱禪師や東嶺老師、明治期の星定老師、大正、昭和期の山本玄峰老師は名僧として知られている。戊辰戦争で西郷隆盛と勝海舟の会談を成立させた山岡鉄舟も、教えを乞いに龍澤寺を訪れたという。開山堂内にはこの4老師像が安置されているが、このうち星定老師像は、鎧細工の名工、伊豆の入江長八の作として知られている。龍澤寺にはこのほかに、不動堂の「上り下りの龍」や住職居間の「天孫降臨図」など、入江長八の作品が多数残っている。



写真 龍澤寺 本堂

ウ 三嶋大社

源頼朝の崇敬に篤かった伊豆国一宮として古くから人々の崇敬を受けてきており、大山祇命（おおやまつみのみこと）と積羽八重事代主神（つみはやえことしろぬしのかみ）の二柱が祀られてきた。祭神に関する記録は『日本書紀』天武天皇 13 年(685)にあり、由緒に関しては『新抄格勅符抄』の諸国神社の封戸を記した中に「伊豆国三嶋神、十三戸、天平宝字二年(七五八)十月二日、九戸、同十二月四戸」とあり、最古の記録とされている。

明治 4 年(1871)に官幣大社となつた際は「三島神社」と登録されており、昭和 27 年(1952)の法人化以降は「三嶋大社」と称している。

三嶋大社本殿、幣殿及び拝殿は、平成 12 年(2000)国指定の文化財に、境内にある樹齢 1200 年と伝えられるキンモクセイは、昭和 9 年(1934)国の天然記念物に指定されている。その他、舞殿、神門及びそれに属する彫刻は昭和 41 年(1966)市の指定文化財に、三嶋大社社叢は平成 3 年(1991)市の天然記念物に、それぞれ指定されている。

以下は、三嶋大社内の建造物、工作物の一部を紹介するものである。

大鳥居

小豆島から切り出した御影石で文久 3 年(1863)に建てられた。



不二亭

明治天皇が桶口本陣に宿泊した折、使用した茶室であり、保存のため昭和 27 年(1952)に移築された。



宝物館

三嶋大社の祭事、歴史、宝物などを分かりやすく展示する施設として、平成 10 年(1998)に設立された。



神池

心という字を形にした神池で、参道を挟んで左右に分かれている。



神馬

三嶋大社の神様は毎朝この神馬にまたがって箱根山に行くと伝えられている。



神鹿園

大正 8 年(1919)3 月に奈良の春日大社より譲り受けた。現在も 3 月 22 日に神鹿記念祭が催されている。



(4) 建造物 有形文化財

ア 隆泉苑

佐野美術館の設立者、佐野隆一氏が両親のために昭和6年(1931)に建て、昭和52年(1977)、遺族により同館に寄贈された建物。同美術館の敷地内にあり、庭園を含めた敷地6,000m²余りの中に建つ平屋建の家屋である。伝統的な木造工法による書院造りと数寄屋造りを併せ持ち、回遊式庭園が落ち着いた雰囲気を醸し出している。



写真 隆泉苑

イ 隆泉苑表門

昭和6年(1931)に建てられた間口の広い両袖扉付の四脚門で、切妻造り、瓦葺の構造になっている。表門の意匠は左右の袖壁と一体的で、上端を開放的に仕上げ、土壁の腰下を縦板貼りとしている。全体的に簡素な造りとしながら、ケヤキの一枚板を用いた門扉は見応えがある。



写真 隆泉苑表門

ウ 懐古堂ムラカミ屋

大正12年(1923)の関東大震災、昭和5年(1930)の北伊豆震災後の復興により、三島市には大正末～昭和初期に多くの建物が建て替えられた。懐古堂ムラカミ屋(旧ムラカミ洋品店 大正15年(1926)建築)は、三嶋大社前という当時の商業地域の中心に位置し、その建築年代や意匠から、三島のまち並みを代表する、壁に銅板を張った看板建築である。



写真 懐古堂ムラカミ屋

エ 三嶋暦師の館(旧河合家住宅主屋)

河合家は三嶋暦を製作していた。建物は木造平屋建て、漆喰塗りの真壁造りで屋根は現在では作られていない特殊な瓦葺となっており、起り破風(むくりはふ)の屋根をもつ式台玄関に特色がある。同家の言い伝えでは幕末に旧家屋が焼失した後、韮山代官江川英龍(坦庵)の計らいで裾野市十里木の関所を解体・移築したという。



写真 三嶋暦師の館

オ 梅御殿

明治 23 年(1890)の小松宮彰仁親王別邸造営の際、京都御所の一部を下賜された木造 2 階建ての建物で、床柱に梅の木が使われている主室に、梅の間があることから梅御殿と呼ばれる。高床式書院数寄屋造りの邸宅は簡素な趣をもつ書院風で、京都画壇の画家による彩色杉戸絵や襖絵がある。



写真 梅御殿

カ 旧三島測候所庁舎

昭和 5 年(1930)の竣工で、同年 11 月に発生した北伊豆地震の被害から免れた鉄筋コンクリート造りの建物である。正面中央部が 2 階、両端部が 1 階建ての左右対称の外観である。モダニズムを基調とし、正面 2 階窓台を半円状に張り出し、玄関のくし型の欄間にステンドグラスをはめこむなど、実用性と機能性を重視するこの種の建築には珍しい意匠性が特徴である。



写真 旧三島測候所庁舎

キ 丸平商店店舗

明治初期に建てられた木造 2 階建ての商店建築である。平成 15 年(2003)には金物店から飲食店に改装された。建物の外部は当時の防火建築である土蔵風仕上げであり、壁の漆喰やなまこ壁、正面入り口の広い間口と大きなガラス戸の意匠、両脇の石造壁、軒を支える太い垂木の構造などに特色がある。



写真 丸平商店店舗

ク 丸平商店土蔵

この土蔵は店舗部分を飲食店に改装した際に店舗の一部として改装された。建物の構造は土蔵造りとなつており、外部は腰が石造り、外壁が土壁下地の漆喰塗りの仕上げで、窓などの開口部周りは防火戸である。内部は松材を使い、床をたたき風の土間に変えてあるが、階段部分をわずかに改修したほかは、ほぼ建築当時の姿が残されている。



写真 丸平商店土蔵

(5) 古今伝授のまち

古今伝授とは、『古今和歌集』の中の語句の解釈を中心に歌学や関連分野の様々な秘説などを師から弟子へ「秘説相承」のかたちで伝授することで、かつて東常縁から宗祇へこの古今伝授が行われた。伝授方法としては、口伝、切紙、抄物がある。

宗祇とは、室町時代、応仁の大乱をはさんで82年(応永28年(1421)生～文亀2年(1502)没)の生涯を乱世の中に生き、連歌という文芸を大成した人物である。出生地については諸説あるが、京都の相国寺で僧として修業し、30歳頃より和歌や連歌の道に専念するようになったという。その生涯で幾つもの句集を出したが、晩年になり、先達7人の句を収集した『竹林抄』と、永享元年(1429)から明応元年(1492)に至る64年間の連歌第二黄金時代の句を収録した『新撰菟玖波集』を完成させたことは、連歌史への最大の貢献となった。

享徳3年(1454)に、八代將軍足利義政の弟の足利政知は、鎌倉公方に任じられ鎌倉に赴こうとするが、前鎌倉公方足利成氏の挙兵により関東には入れず、伊豆国韭山の堀越に滞留した。このとき幕府から援軍として派遣されたのが、武将であり歌人の東常縁である。

常縁は、美濃郡上の領主であり、また、古今和歌集の奥秘を学んだ歌人でもあった。この時、常縁から秘伝の授受を乞うために、宗祇が三島を訪れる。しかし、常縁の子の竹一丸が病にかかったことで、宗祇への伝授ができなくなった。そこで、宗祇は三嶋大社に祈り、「三島千句」を奉納したところ竹一丸の病はほどなく治り、伝授が実現した。

なお、常縁から宗祇に行われたものが、その後の古今伝授の原型となったという。またこの時、常縁と宗祇の間では口頭伝授だけではなく切紙伝授も行われた。芸能・武芸などにおいて、半切した紙によって免許を与えることを切紙というが、この切紙による伝授も、東常縁によってその形式が完成されたといわれる。

三島で古今伝授がなされたことの傍証として、三島千句が三嶋大社宮司である矢田部家から発見されたこと、鎌倉古道沿いの川原ヶ谷城跡に建つ願成寺で宗祇の三百五十年法要の関連資料が見つかったこと、願成寺が三島千句を奉納した三嶋大社の歴代宮司の菩提寺であることに基づき、市内有志グループは古今伝授の研究会を開催し、標柱を設置するなど、三島が古今伝授のまちであることを啓発する活動を行っている。



写真 三島駅前に建つ標柱



写真 三嶋大社内に建つ標柱

2-3 三島市の歴史・文化に関わる主な人物

(1) 歴史に関わる人物

ア 源頼朝 【久安3年(1147)～正治元年(1199)】

清和源氏の嫡流源義朝の三男であり、母は熱田大宮司家藤原季範の娘である。平治元年(1159)の平治の乱で平清盛軍に敗れた義朝の息子頼朝は清盛の継母である池禪尼の助命嘆願により一命を助けられ、伊豆国北條蛭ヶ小島に配流された。以来約20年の流人生活を送る中で、三嶋大社に百日の祈願をかけたと言われ、間眠神社や妻塚、手無地蔵など、市内では頼朝伝説の史跡が多く見られる。建久3年(1192)、頼朝は朝廷から征夷大将軍に任命され、鎌倉に武家政権の拠点を築いた。



写真 蛭ヶ島公園内銅像
北条政子（左）源頼朝（右）

イ 江川英龍 【享和元年(1801)～安政2年(1855)】

宝暦9年(1759)の幕政改革により三島代官は韮山代官に併合された。英龍は江戸時代後期の幕臣で伊豆韮山代官である。通称太郎左衛門、号を坦庵という。幕末の海防政策において果たした役割は大きく、西洋砲術の普及・台場築造・反射炉建設・農兵隊の採用など、その業績は多岐に及ぶ。河合家邸宅(現三嶋歴史の館)が嘉永7年(1854)の大地震で倒壊し、さらに火災となり焼失した際、英龍の計らいで、廃屋になっていた十里木(現裾野市)の閑所を解体して移築したという。

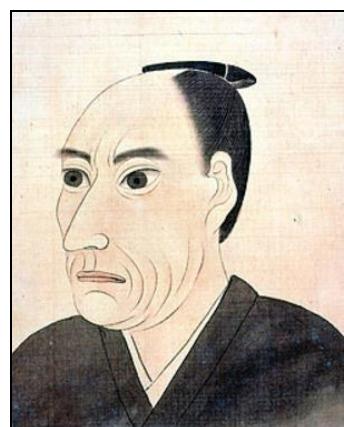


写真 自画像

ウ 矢田部盛治 【文政7年(1824)～明治4年(1871)】

三嶋大社神主(宮司)である。幕末の嘉永7年(1854)に、東海大地震の被害を受けて神殿を始めとした三十有余の建物が倒壊した。当時の宮司であった矢田部盛治は社殿など建物の再建復興に尽力し、明治2年(1869)にそれらの造営が完了して現在の三嶋大社の姿となった。社殿の再興のほか、大場川の治水工事、祇園山隧道(ぎおんやまざいどう)の開削など三島地域の開発に尽力した。

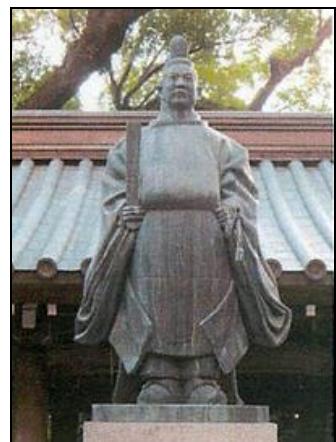


写真 三嶋大社境内銅像

工 山本玄峰老師 【慶応2年(1866)～昭和36年(1961)】

三島市沢地にある円通山龍澤寺第9代住持である。大正4年(1915)に龍澤寺に入山し、当時廃寺寸前だった寺を復興させることに尽力した。地域の人々とも親密に交流し、寺の繁栄に大きく貢献した。その名声は全国に広まり、老師の導きを受けようと、多くの雲水や信者をはじめ、終戦時の総理大臣であった鈴木貫太郎、吉田茂、池田勇人など政財界の大物も訪れたという。終戦直前に老師を訪ねた鈴木貫太郎は「忍び難きを忍べ」と諭され、天皇の終戦の詔書に、老師の助言が反映されたといわれる。

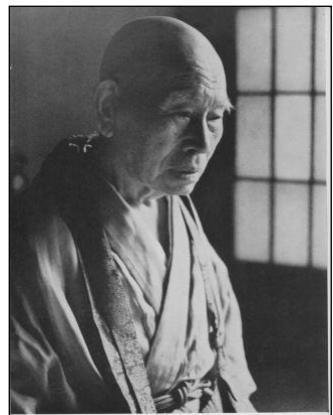


写真 晩年の玄峰老師

(2) 文化に関わる人物

ア 幸若與惣太夫 (こうわかよそうだゆう)

室町幕府末期の天文年間(1532～1555)において、祭りを演出したのは、戦国大名に愛好されて、時流に乗った幸若舞の一派であった。その源流は声聞師という中世に祝福芸に携わる下級民衆芸能者である。声聞師の本業は経読に関するものと、久世舞(曲舞)であり、曲舞は祇園や御靈会の風流(踊り)として、しばしば山車上で舞われるようになり、全国に流行した。この時流に乗って、越前国丹生郡田中村より上洛した幸若太夫が、後の幸若舞の主流となり各地方へ拡散し、幸若與惣太夫もこの幸若一派の流れであったといわれる。三島大社の舞々役で三島囃子の原型をつくったとされる。

イ 小松宮彰仁親王 【弘化3年(1846)～明治36年(1903)】

伏見宮家の第8子として誕生。3歳で仁孝天皇の養子となり、13歳で京都仁和寺に入寺。幕末の鳥羽伏見の戦いでは征討大將軍として徳川幕府を追討した。

彰仁親王は小浜池の山紫水明な風景を気に入り、明治24～25年(1891～1892)、別邸(楽寿館)を本市の小浜池側に構築し、三島の人々にとって最も親しみ深い宮様となった。楽寿園が今日名勝・天然記念物として国指定を受けたことも、宮殿下がこの地に別邸を建築し、その後の所有者がよく保存したためである。

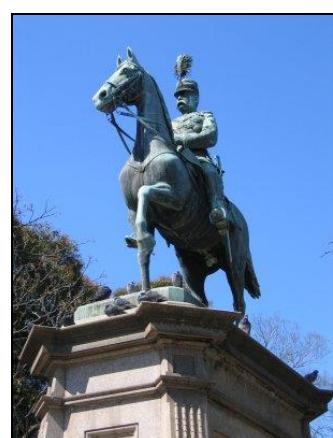


写真 上野恩寵公園内銅像

ウ 平井源太郎 【明治15年(1882)～昭和15年(1940)】

現在の中央町で酒屋を営んでいた平井源介の長男として誕生した。同家は大正時代に三島の野戦重砲兵連隊に沢庵漬けを納めるなど手広く商売をしていたが、伝染病の影響で取引が止められ閉店を余儀なくされた。家業を捨てた源太郎は、街頭に立ち、生産農家と庶民のための「商道改革」を訴え始め、昭和12年(1937)、町議となつた一方で、各地に箱根西麓地区の野菜を売り出そうと、三島民謡として農兵節に踊りをつけて唄いながら宣伝をして歩き、大阪市場の開拓に貢献した。

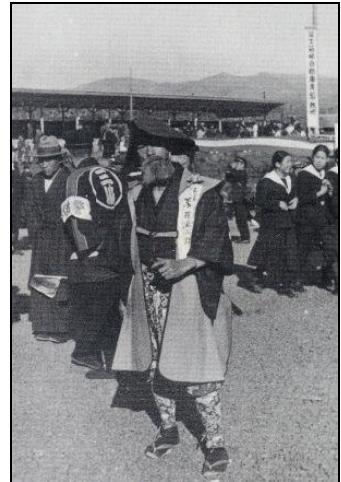


写真 三島駅開業式での
平井源太郎

エ 佐野隆一 【明治22年(1889)～昭和52年(1977)】

昭和41年(1966)、回遊式庭園と日本刀・薙刀の名品を数多く所蔵する佐野美術館を設立したことで知られている。このほかにも惜しみなく私財を郷土三島の教育・福祉・文化面に投じ、昭和40年(1965)に最初の三島市の名誉市民になった。

高級菓子舗の長男として久保町(現中央町)に生まれ、東京工業専門学校(現東京工业大学)応用化学科を卒業。横浜製糖、中村科学研究所勤務を経て、大正14年(1925)、鉄興社を設立し、以後、日本石英硝子㈱、プラス・テク㈱、日本カーボン㈱と10社近くの会社を興し、戦後の日本経済を支える原動力となつた。また、電気化学協会の会長をはじめ多くの業界団体の要職を歴任し、産業界に大きな足跡を残した。これらの功績を持って、87歳で亡くなるまでの間に、紺綬褒章を16回受けたほか、緑綬褒章、紫綬褒章、藍綬褒章、勲二等瑞宝章を受章、逝去に際し正四位に叙せられ勲二等旭日重光章を受けた。



写真 三島市名誉市民第1号の
佐野隆一氏

3 文化財の分布状況

三島市には数多くの文化財が残っている。国指定文化財は26件あり、絵画2件、彫刻1件、工芸品12件、書跡3件、古文書1件、建造物1件、史跡3件、名勝1件、天然記念物2件となっている。

また、建造物を対象として、8件が国登録有形文化財とされており、伝統的木造工法による建造物や三嶋大社周辺に建てられた商店、モダニズムを基調として建てられた旧測候所庁舎などが登録されている。

県指定文化財は13件あり、絵画2件、彫刻1件、工芸品3件、典籍2件、史跡1件、天然記念物2件、無形民俗文化財2件が指定を受けている。

市指定文化財は47件あり、絵画10件、彫刻2件、工芸3件、典籍6件、古文書1件、考古資料5件、歴史資料4件、建造物7件、史跡1件、天然記念物8件が指定を受けている。

指定文化財件数 (平成28年3月31日現在)

類型	国指定	県指定	市指定	国登録	合計
有形文化財	絵画	2	2	10	14
	彫刻	1	1	2	4
	工芸品	12	3	3	18
	書跡	3	—	—	3
	典籍	—	2	6	8
	古文書	1	—	1	2
	考古資料	—	—	5	5
	歴史資料	—	—	4	4
	建造物	1	—	7	8
記念物	史跡	3	1	1	5
	名勝	1	—	—	1
	天然記念物	2	2	8	12
民俗文化財	無形民俗	—	2	—	2
合計		26 (25)	13	47	89 (93)

注 史跡名勝天然記念物には重複指定があり、() 内は実指定件数を示す。

(1) 国指定文化財



国指定文化財位置図

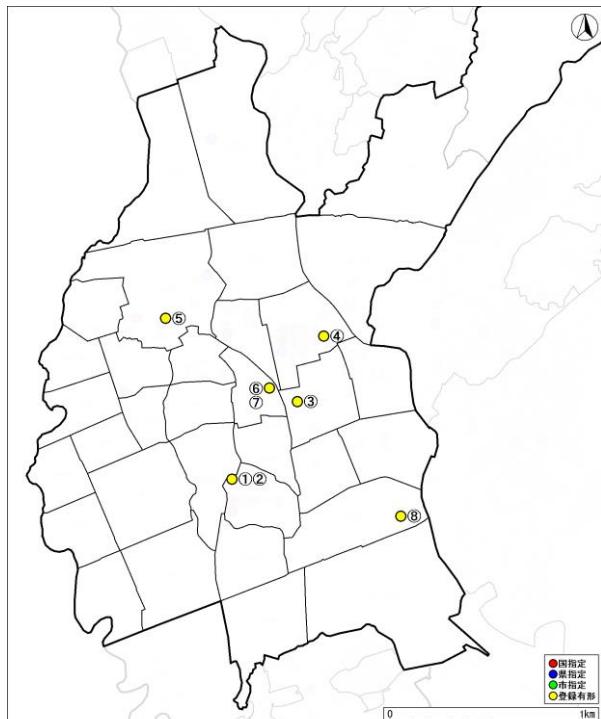
国指定文化財一覧

No.	種別	名称	所有者、管理者	所在地
1	国宝(工芸品)	梅蒔絵手箱	三嶋大社	大宮町
2	国宝(工芸品)	薙刀 銘備前国長船住人長光造	佐野美術館	中田町
3	重文(絵画)	絹本著色日蓮上人像	妙法華寺	玉沢
4	重文(絵画)	絹本著色十界勸請大曼茶羅図(絵曼茶羅)	妙法華寺	玉沢
5	重文(彫刻)	木造大如来坐像	佐野美術館	中田町
6	重文(工芸品)	太刀 銘宗忠	三嶋大社	大宮町
7	重文(工芸品)	脇指 銘 表二 相模国住秋義 伊豆 三島大明神 裏二 奉拝佐藤松千代貞成	三嶋大社	大宮町
8	重文(工芸品)	短刀 銘 表二 三島大明神他人不与 之 裏二 貞治三年藤原友行	三嶋大社	大宮町
9	重文(工芸品)	太刀 銘長元	佐野美術館	中田町
10	重文(工芸品)	短刀 銘国光	佐野美術館	中田町
11	重文(工芸品)	刀 無銘正宗	佐野美術館	中田町
12	重文(工芸品)	刀 朱銘義弘(名物松井郷) 本阿 (花押)	佐野美術館	中田町
13	重文(工芸品)	刀 金象嵌銘備前国兼光(名物大兼 光) 本阿弥(花押)	佐野美術館	中田町

14	重文(工芸品)	秋草文黒漆太刀 中身銘豊後国行平作	佐野美術館	中田町
15	重文(工芸品)	脇指 銘相模国住人廣光 庚安二年十月日	佐野美術館	中田町
16	重文(書跡)	注法華經(開結共) 日蓮自注	妙法華寺	玉沢
17	重文(書跡)	撰時抄 日蓮筆	妙法華寺	玉沢
18	重文(書跡)	般若心經(源頼家筆)	三嶋大社	大宮町
19	重文(古文書)	三嶋大社矢田部家文書	三嶋大社、矢田部正巳	
20	重文(建造物)	三嶋大社本殿、幣殿及び拝殿	三嶋大社	大宮町
21	史跡	山中城跡	三島市	山中新田
22	史跡	伊豆国分寺塔跡	伊豆国分寺	泉町
23	史跡	箱根旧街道	三島市	箱根町、三島市 函南町
24	名勝	楽寿園	三島市	一番町
25	天然記念物			
26	天然記念物	三嶋大社のキンモクセイ	三嶋大社	大宮町

注 重文とは重要文化財の略。

(2) 登録有形文化財

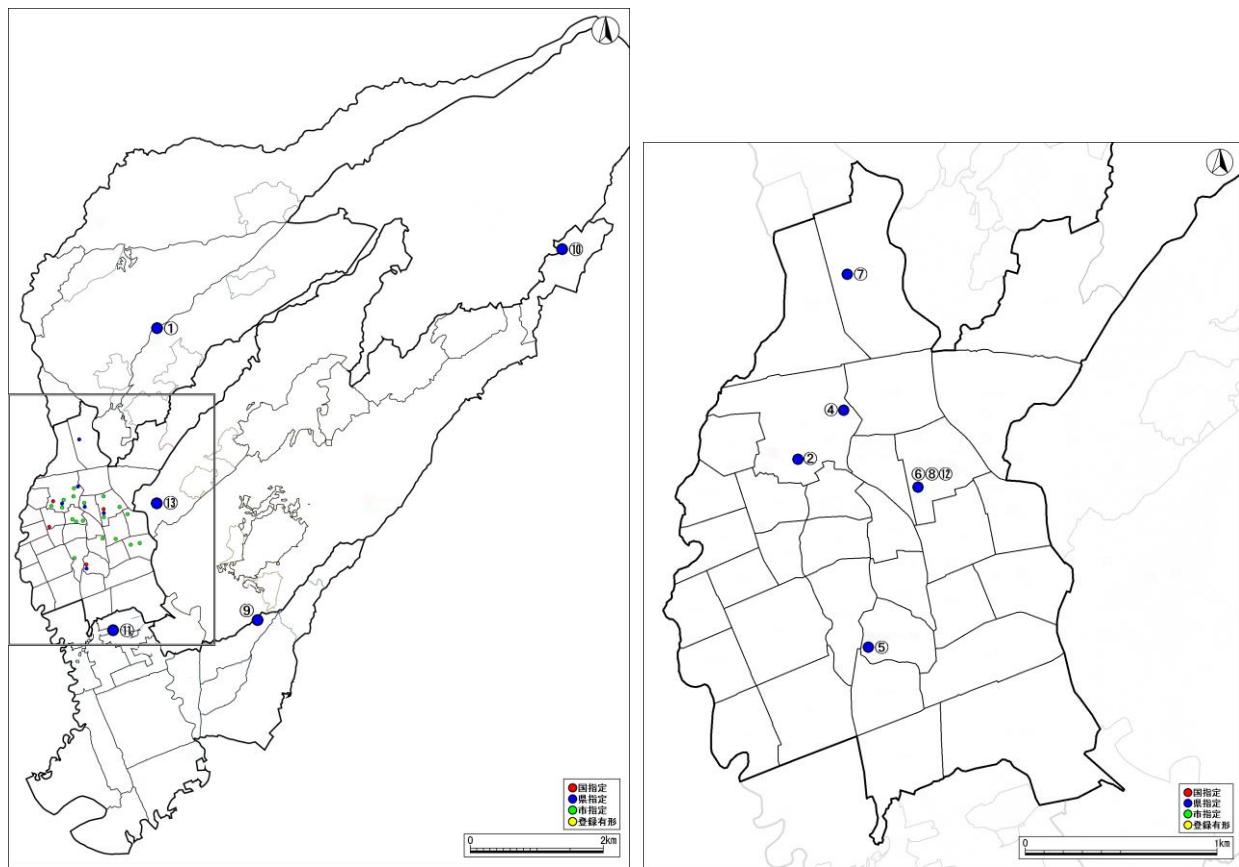


登録有形文化財位置図

登録有形文化財一覧

No.	名称	構造及び形式	所在地	建築年代等
1	隆泉苑	木造平屋建、瓦葺	中田町1-43	昭和6年
2	隆泉苑表門	木造四脚門袖屏付、瓦葺	中田町1-43	昭和6年
3	懐古堂ムラカミ屋	木造2階建、鉄板葺	大社町18-5	大正15年
4	三嶋暦師の館 (旧河合家住宅主屋)	木造平屋建、瓦葺	大宮町2-5-16	江戸末期
5	梅御殿	木造2階建、鉄板葺	一番町15-6	明治中期
6	丸平商店店舗	木造2階建、瓦葺	中央町4-16	明治初期
7	丸平商店土蔵	土蔵造及び石造2階建、瓦葺	中央町4-16	明治初期
8	旧三島測候所庁舎	鉄筋コンクリート造2階建	東本町2-5-24	昭和5年

(3) 県指定文化財

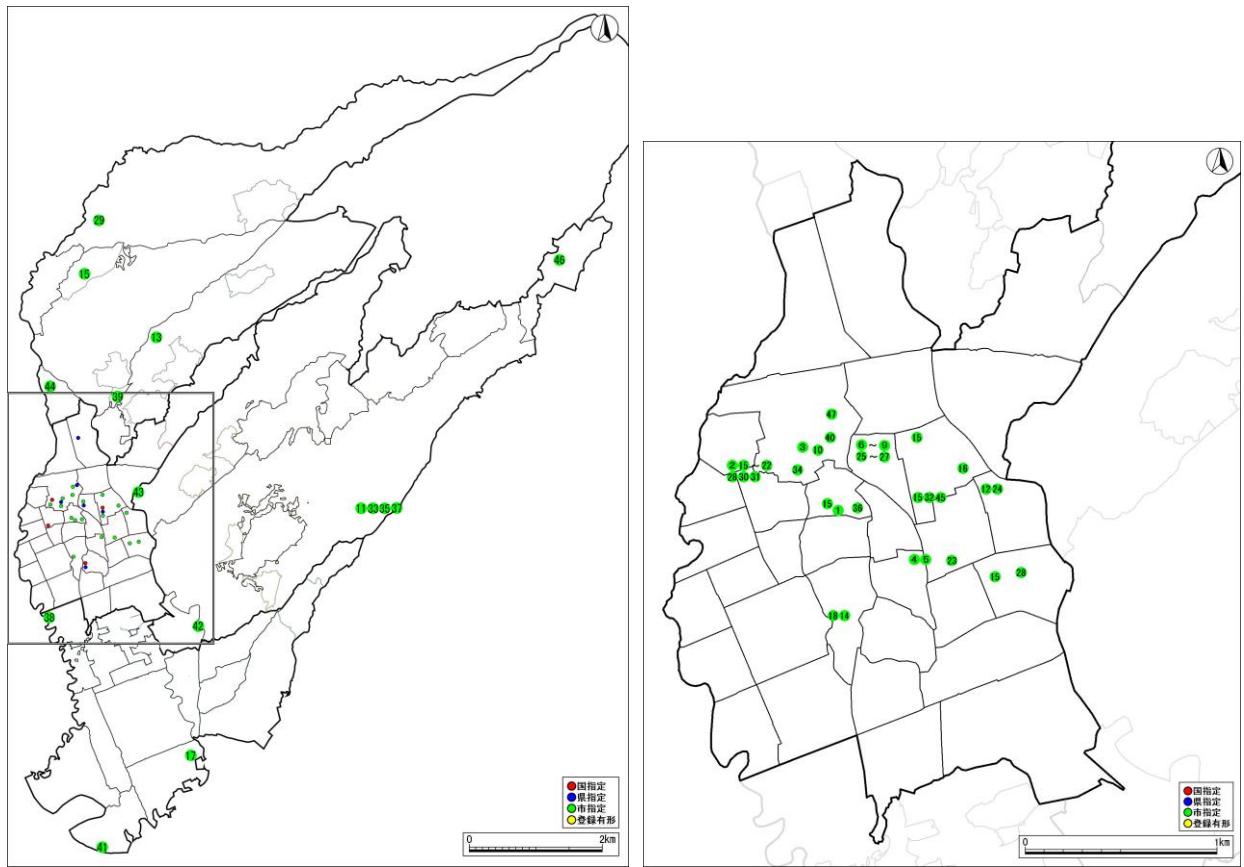


県指定文化財位置図

県指定文化財一覧

No.	種別	名称	所有者、管理者	所在地
1	絵画	紙本著色白隱自画像	龍澤寺	沢地
2	絵画	楽寿館・楽寿の間絵画	三島市	一番町
3	彫刻	木造阿弥陀如来立像	—	—
4	工芸	刀 銘莊司筑前大掾大慶藤直胤(花押) 天保二年仲秋イツ(刻印)	個人蔵	一番町
5	工芸	刀 銘繁慶	佐野美術館	中田町
6	工芸	三十六歌仙図刺繡額	三嶋大社	大宮町
7	典籍	聚分韻略	日本大学	文教町
8	典籍	日本書記並びに具書	三嶋大社	大宮町
9	史跡	向山古墳群	三島市	谷田、北沢
10	天然記念物	駒形・諏訪神社の大カシ	駒形・諏訪神社	山中新田
11	天然記念物	御嶽神社の親子モッコク	御嶽神社	青木
12	無形民俗	三嶋大社のお田打	三嶋大社のお田打奉仕者	大宮町
13	無形民俗	三島囃子	三島囃子保存会	川原ヶ谷

(4) 市指定文化財



市指定文化財位置図

市指定文化財一覧

No.	種別	名称	所有者、管理者	所在地
1	絵画	小沼満英筆 三島宿風俗絵屏風	三島信用金庫	芝本町
2	絵画	栗原忠二画「月島の月」	郷土資料館	一番町
3	絵画	梅御殿装飾絵画	三島市	一番町
4	絵画	下田舜堂画「朝焼けの富士」	三島市	北田町
5	絵画	下田舜堂画「小浜池」	三島市	北田町
6	絵画	細井繁誠画「月と芋畠」	三島市	大宮町
7	絵画	杉本英一画「絵画教室」	三島市	大宮町
8	絵画	芹沢晋吾画「農夫」	三島市	大宮町
9	絵画	大沼貞夫画「日輪ボロブドゥール幻想」	三島市	大宮町
10	絵画	大沼貞夫画「魔性と仮性(ボロブドゥール考) A・B」	三島市	一番町
11	彫刻	金剛力士像(阿形像、吽形像)	妙法華寺	玉沢
12	彫刻	光安寺 鼻取り地蔵	光安寺	日の出町
13	工芸	龍澤寺隠寮内入江長八鍛細工	龍澤寺	沢地
14	工芸	織部どうろう	個人蔵	南本町
15	工芸	三四呂人形	郷土資料館 個人蔵	一番町
16	典籍	河合家所蔵 三島暦及び同版木並びに関係文書	個人蔵 郷土資料館他	大宮町 一番町

三島市歴史的風致維持向上計画 第1章

17	典籍	秋山家所蔵 秋山富南古文書 原本豆州志稿他7	郷土資料館 個人蔵	一番町 安久
18	典籍	樋口家所蔵 三島宿本陣関係史料	郷土資料館 個人蔵	一番町 南本町
19	典籍	世古文書	郷土資料館 個人蔵	一番町 相模原市
20	典籍	落合家文書「天正十八年『豆州君澤郡中嶋郷御縄打水帳』外 地方文書」	郷土資料館	一番町
21	典籍	接待茶屋関係文書	郷土資料館	一番町
22	古文書	天正十八年 豊臣秀吉捷書	郷土資料館	一番町
23	考古資料	市ヶ原廃寺塔心礎	祐泉寺	大社町
24	考古資料	光安寺板碑	光安寺	日の出町
25	考古資料	向山古墳出土遺物(鉄製品)	三島市	大宮町
26	考古資料	吊手土器	三島市	大宮町
27	考古資料	箱根田遺跡出土祭祀関係遺物	三島市	大宮町
28	歴史資料	扁額「三島覺」	郷土資料館、 東小学校	一番町 東町
29	歴史資料	「豆州伊豆佐野村」絵図	個人蔵	佐野
30	歴史資料	花島家資料	郷土資料館	大宮町
31	歴史資料	接待茶屋関係調度品大茶釜外3点	郷土資料館	大宮町
32	建造物	三嶋大社 舞殿、神門及びそれに属する彫刻	三嶋大社	大宮町
33	建造物	玉澤妙法華寺庫裡	妙法華寺	玉沢
34	建造物	樂寿園内樂寿館	三島市	一番町
35	建造物	玉澤妙法華寺中鐘楼	妙法華寺	玉沢
36	建造物	円明寺表門(伝樋口本陣表門)	円明寺	芝本町
37	建造物	経王山 妙法華寺伽藍 大書院・本堂・祖師堂 ・奥書院・中門・忠靈殿	妙法華寺	玉沢
38	建造物	禅叢寺鐘樓門	禅叢寺	玉川
39	史跡	千枚原遺跡	三島市	千枚原
40	天然記念物	愛染院跡の溶岩塚	三島市	一番町
41	天然記念物	神明宮神社社叢	神明宮神社	御園
42	天然記念物	中のカシワ	個人宅で管理	中
43	天然記念物	願成寺 クス	願成寺	川原ヶ谷
44	天然記念物	耳石神社 イタジイ	耳石神社	幸原町
45	天然記念物	三嶋大社社叢	三嶋大社	大宮町
46	天然記念物	矢立の杉	駒形・諏訪神社	山中新田
47	天然記念物	鏡池横臥溶岩樹型	三島市	一番町